

## 鹿児島県沖永良部島のシニグ・ウミリ伝承

原田 信之<sup>1)</sup>\*

1) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2022年9月21日受付、11月16日受理)

琉球文化圏北部地域にはシヌグ系・ウンジャミ系祭事が伝えられているが、祭事の内容・呼称は地域ごとに差があり不分明な点が多い。沖永良部島には「シニグ」「ウミリ」という祭事があったが、シニグは明治三年を最後に中止され、ウミリは昭和末年頃に廃絶した。沖永良部島には北山王の子で世之主(?～一四一六頃没)と称される人物が島を統治し、世之主生誕時にはすでにシニグが行われていたという伝承がある。その伝承が正しいとした場合、シニグの成立は少なくとも北山時代の十四世紀半ば頃まで遡る可能性がある。「初シニグ」は士族の「男子」の子弟が行うことから、琉球文化圏北部地域のシヌグと共通している。西原のウミリは「女性」を主とする祭事であったらしく、国頭のウミリは「ネイリヤー」(ニライカナイ)の神々を見送る神事だと伝承されていることから、ウミリは琉球文化圏北部地域のウンジャミと同系の祭りとみられる。シヌグ系・ウンジャミ系祭事の分布域は、北山文化圏とほぼ重なっている。また、沖永良部島のシニグ祭りの成立が十四世紀半ば頃まで遡るとした場合、その頃は北山統治下で中山の力は及んでいない。これらのことから、沖永良部島の「シニグ」「ウミリ」は、シヌグ系・ウンジャミ系祭事であり、シヌグ系・ウンジャミ系祭事は北山文化圏を中心に行われた北山系祭事であった可能性が高いと推定して良いように思われる。

(キーワード) 沖永良部島、世之主、北山文化、シヌグ、ウンジャミ

### はじめに

奄美諸島の沖永良部島(鹿児島県大島郡和泊町・知名町)は、琉球文化圏の中にあり、祭事についても琉球文化の影響が強い。

『中山世鑑』(一六五〇年成立)や『中山世譜』(一七二五年成立)等の琉球の正史によれば、琉球の歴代王統は、神話時代にあたる天孫氏時代を除外すると、舜天王統(一一八七～一二五九)以降、英祖王統(一二六〇～一三四九)、察度王統(一三五〇～一四〇五)、第一尚氏王統(一四〇六～一四六九)、第二尚氏王統(一四七〇～一八七九)と続いた。この琉球の歴代王統を日本本土の歴史と対照させると、舜天王統から第二尚氏王統前期まではほぼ日本の中世に相当し、第二尚氏王統後期は日本本土の近世に相当する。

琉球の正史によれば、中山の英祖王統四代目玉城王が酒色におぼれて政務を怠ったため、延祐年間(一三一四～一三二〇)に国が山南・山北・中山の三つに分かれて抗争する時代になったが、やがて第一尚氏王統の尚巴志によって三山が統一されたという(以下、南山・北山と記す)。しかし、近年では、第一尚氏王統成立以前はグスク時代と呼称され、グスク時代に各地の按司たちが割拠して三山が勢力を伸ばすようになったが(三山時代)、やがて中山の第

一尚氏王統尚巴志によって三山が統一されたと考えられるようになってきている<sup>1)</sup>。

奄美諸島は、琉球の正史によると、一二六六年(南宋・咸淳二年、元・至元三年、日本・文永三年)に琉球王英祖に入貢してから琉球王国の統治下にあったという<sup>2)</sup>。しかし、近年は、『改訂名瀬市誌1巻歴史編』が「大島が一二六六年(文永三年)、琉球王の徳を慕い自ら進んでその支配下に入ったとする従来の説は、独善的な琉球王朝の歴史家が徳川時代の初期に、華夷思想によって創作したもので根拠はない。李朝実録その他によって考えるに、大島が尚巴志王の息子たちの率いる勝連水軍によって征服されたのが一四四〇年前後、徳之島以南の併どんはそれ以前、多年抗戦していた喜界島が尚徳王の親征軍によってついに制圧されたのが一四六四年、というのが真相である<sup>3)</sup>と述べているように、十三世紀からではなく十五世紀中頃から琉球王国の統治下にあったと考えられるようになってきている。

沖縄本島北部地域から奄美諸島の与論島や沖永良部島にかけて、「ウンジャミ」、「シヌグ」などと呼称される祭事が分布している(島によって呼称に差異がある)<sup>4)</sup>。これらの祭事の内容は地域ごとに差があり、不分明な点が多い。沖永良部島において「ウンジャミ」「シヌグ」などと呼称される祭事と類似のものともみられるものに、「シニグ

\*連絡先: 原田信之 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

（シング）」と「ウミリ（ウミリー）」という祭事があった。沖永良部島では明治三年まで「シニグ」が行われ、昭和末年頃まで「ウミリ」という祭事が行われていたが、現在はともに廃絶祭祀となっている。本稿は、沖永良部島の「シニグ」と「ウミリ」という祭事および祭事をめぐる諸問題について検討することを目的とする（シヌグ、シニグ、シングなどの表記の統一は行わない）。

## 1 沖永良部島世之主とシニグ

琉球における三山時代には、大里按司が「山南王」を称し、今帰仁按司が「山北王」を称して中山王と対立した。沖永良部島には、かつて世之主と称される人物が島を統治していたという伝承がある（世之主とは地方の領主のことで、統一国家成立後は国王も世之主と称された）<sup>5)</sup>。興味深いのは、沖永良部世之主は北山王の子と伝えられている点である。沖永良部世之主に関する文献資料としては、「世之主に関する記録」「世の主由来与人西平調書」「世乃主由緒書」の三つが知られている<sup>6)</sup>。

まず、「世之主に関する記録」の一部を引用する（適宜句読点、傍線を付した。丸括弧内は『沖永良部島郷土史資料』による注記）<sup>7)</sup>。

### ◆「世之主に関する記録」（一七一一年成立）

宝永七年（中御門天皇皇紀二三七〇年）沖永良部与人役大坪平安山（大坪氏の祖）与人役具永久（陽兼良氏の祖）与人役久米村（前氏の祖）与人役前里（与論島大野前弘氏の祖）与人役喜久里（与論麓氏の祖）の五名薩藩の命を受け世の主の由来及制度風俗を調査して五名連署を以て藩庁に上書せし書類に依る世の主の事実を確むべき所以を得べし。／道の島与人役の者共金の髪差並に朝衣大帯使用の儀内証にて御許被遊候由被仰渡候事承知候。右に付申伝候儀共御内意にて申上候。／覚／沖永良部島本琉球御支配の時、毎村女一人宛「ぬる久米」と申役目被召建代り合ひの節は琉球へ罷り渡り御届申上候を以て「ぬる久米」役を被仰付朱書印判の御書付被下申候。然るに上城村の「ぬる久米」代り合ひの節、年頃十四五歳の娘召連琉球へ渡海致候処、右娘生付美々敷其上器量衆人に勝れ国王様の御目に立ち御所望被遊候に付差上申候処、其の後右腹に王子懐妊被遊御出生。御成人の後、沖永良部島被成下御渡海の後、内城村へ御城御普請有之、世主と奉称附入其外役々の儀琉球に準じ御召連夫々官位に応じ金銀の髪差朝衣朝冠大帯着用仕候由。世主御在世の時は、三年に一度島中御巡視有之。村役人の者共其白黒赤の鉢巻木綿白地の胴衣袴着用致途中御迎へに罷出候由。今に城籠（シニグ）祭と申伝へ、其例有之申候。（中略）／右の通り私共承伝申候道の島老幼の者共又は島々の代官所へ度々申上候事。／宝永八卯年御国許書き合ひ一卷／与人 平安山／全 具永久／全

久米村／与論与人 前里／全 喜久里

「世之主に関する記録」は、宝永八（一七一一）年の年号があり、世之主に言及した文献中最も古いものとされている。琉球御支配の時、上城村のノロ交替の際に十四、五歳の娘を連れて琉球に行ったところ、娘の美しさが国王の目にとまり、やがて娘は王子を懐妊した。王子は成人後沖永良部島統治のために渡海し、内城村に城を造って世主と称された、という内容が記されている。奄美の地方（じかた）役人である与人（よひと）五名が薩摩藩の命を受けて世之主の由来および制度風俗を調査して藩庁に上書した書類であるという。一六〇九年の島津の琉球侵入から百年後の文献であるため、「沖永良部島本琉球御支配の時」と記されている。「琉球」の「国王」とのみあるため、北山王かどうかかわからない記述となっている。

注目されるのが傍線部の「世主御在世の時は、三年に一度島中御巡視有之。村役人の者共其白黒赤の鉢巻木綿白地の胴衣袴着用致途中御迎へに罷出候由。今に城籠（シニグ）祭と申伝へ、其例有之申候。」という部分で、ここから、世之主在世中から「城籠（シニグ）祭」が三年に一度行われていたことと、この文書が書かれた宝永八（一七一一）年時点においてもシニグ祭りが三年に一度行われていたことがうかがえる。

### ◆「世の主由来与人西平調書」（一七四四～一七四八年頃成立）<sup>8)</sup>

琉球御支配の時、上城村のノロ交替の際に十四歳の娘を連れて琉球に行ったところ、娘の美しさが国王の目にとまりご所望になったので、差し上げて帰島した。その後娘は王子を生み、王子は成人後、徳之島、大島、喜界島まで統治し、沖永良部島内城に城を構え世主と称されたが、事情があって切腹された。城が減じた時に五、六歳と七、八歳になる子がおり、親の物語を語ったといい、その伝承を与人西平が書きとどめた。〈梗概〉

玉江末駒氏「沖永良部史稿本」に引用されている「世の主由来与人西平調書」には年号がないが、玉江氏が「延亨（享カ）年間与人西平なる人の調書なるものあり」と記述していることから、延享年間（一七四四～一七四八）に与人西平によって記された調書らしいことがわかる（亨は享の誤植とみられる）。

この「世の主由来与人西平調書」は、先の「世之主に関する記録」より約三十五年後に記されたもののようであるが、沖永良部島の他、徳之島、大島、喜界島も統治していたこと、世之主は切腹したこと、五、六歳と七、八歳になる子が残されたという情報が新たに追加されていることがわかる。この「世の主由来与人西平調書」も先の「世之主に関する記録」と同様に「沖永良部琉球御支配の時」、世之主の親は「琉球」の「国王」とのみあり、北山王かどうかかわからない記述となっている。

### ◆「世乃主由緒書」（一八五〇年成立）<sup>9)</sup>

沖永良部島の先主であった世之主は幼名を真松千代王子といった。右の御由緒を私の先祖から左条の通り申し伝えている。琉球国は往古は三山があり、今帰仁城主北山王は国頭九間切のほか、伊江島、伊平屋島、与論島、沖永良部島、徳之島、大島、喜界島まで領有していた。北山王の二男真松千代王子は沖永良部島を統治するため渡海し、玉城村金の塔に屋敷を構えた。後、大城村の川内の百の提言で大城村の古城地に築城することになり、築城を命じられた後蘭孫八が三年で御居城を完成させた。世之主の奥方は、中山王の姫でお名前を真照間兼之前といった。やがて北山と南山が中山に滅ぼされ、中山からの和睦船数艘を軍船と思ひ込んだ世之主は自害した。その際、世之主の三歳の男子と五歳の女子が乳母とともに徳之島に逃げた。その後、中山領として島も治まったので、島役たちが王子を迎えに渡海し、二子は御帰島された。古城の北の小高い所に屋敷を構えられ、そこは今でも直城と称されている。この王子の子孫は中山王の御取り立てによって代々大屋役を仰せ付き勤めて来た。これにより、私までも島中の者が大屋の子孫と称しているが、大屋役を何代勤めたかはわからない。世之主の女子は王女であることから嫁入できず、古城の下の庵で孤独に一生を終えたといい、この小庵の屋敷は今も男子禁戒とされている。黄美留菜津久美という宝刀のことが伝えられている。世之主の時代に、黄美留村の者が刀を釣り上げたが、石も切る宝刀であった。夜々海中で光を発するのが城からも見え、使者をやって刀をお取り寄せになり、城で秘蔵されたという。その頃、世之主に仕えていた島尻村の国吉里主が名馬を二頭所持していたが、世之主が二頭とも取り上げたので恨んで中山に逃げ、私の主君は黄美留菜津久美という宝刀と名馬を所持して中山王への謀反を企てていると讒言した。中山より使者が来て、宝刀を見せてほしいとの申し入れがあったが、世之主は断った。しかし、中山の家臣が密かに世之主の奥方に手を回して盗み取って帰国した。その後、北山王が滅ぼされ、宝刀も盗まれて落ち込んでいたところに、中山より数艘の船が来たのを軍船と判断して自害された。右の通り、私の先祖より代々言い伝えられている。／与人格本間横目勤／内城村居住 平 安統／嘉永三年戊（戌カ）三月（梗概）

嘉永三（一八五〇）年戊三月の年号がある「世乃主由緒書」は、世之主の子孫とされる宗家の先祖平安統が記したもので、世之主に言及した文献で最もまとまった内容を持っている（戊は戌の誤植）。「世乃主由緒書」は「世の主由来与人西平調書」よりさらに百年後に記されたもので、世之主に関してかなり詳しい逸話が述べてある。

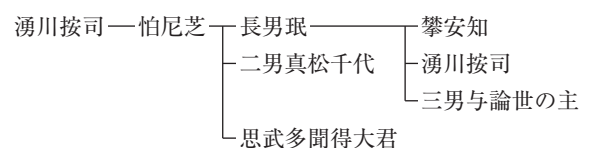
「世之主に関する記録」（一七一一年成立）から「世乃主由緒書」（一八五〇年成立）へと時代が経過するほど、世之主伝説がふくらんできてきているらしいことがうかがえる。「世之主に関する記録」（一七一一年成立）と「世の主由

来与人西平調書」（一七四四～一七四八年頃成立）では上城村のノロ交替の際に琉球へ連れて行った娘と琉球国王との子が世之主であったという逸話が話の核となっていたが、「世乃主由緒書」（一八五〇年成立）ではそれに関する記述がまったくなく、その代わりに、世之主は北山王の二男真松千代王子で、世之主の奥方は中山王の姫の真照間兼之前だという説明がなされている。

沖永良部島では、世之主が自害したのは北山が滅びた明の永楽十四（一四一六）年か翌年頃だと考えられているようである。「世乃主由緒書」（一八五〇年成立）の末部にある「北山王も落城、宝刀も被盜取旁々付氣鬱被成居候折柄中山より数艘船渡海に付き、軍船と御心得御自害の由申伝も御座候」という記述に従えば、世之主は北山滅亡後に自害したと考えることができる。しかし、「世乃主由緒書」の前半部には、「北山今帰仁城之儀は中山之大將本部太原と申すものより被攻亡され南山も落城終には中山一統に相成爲由、右に就て世の主かなし事頼むなき小島にて鬱々として被成御座候折柄中山より和睦の使船数艘渡海有之候由、未実否御聞届も不被成此方事北山之二男にて候得ば中山より軍船に相違無之候、左候へば小島を以て大国へ難敵と直と奥方を始め御嫡子其の外無残御差違へ御自害の由」とも記されている。つまり、北山と南山が中山に滅ぼされ、それについて世之主が鬱々と悩んでいる時に中山から和睦船数艘が渡海してきて、それを軍船と思ひ込んだ世之主は自害したというのである。このことから、「世乃主由緒書」は、北山が滅ぼされた永楽十四（一四一六）年以後に世之主が自害したとも、南山が滅ぼされた宣徳四（一四二九）年以後に世之主が自害したとも読むことができる記述となっていることがわかる。（ただし、本稿では、北山が滅ぼされた一四一六年に世之主が自害したという通常の説にしたがうことにしたい）。

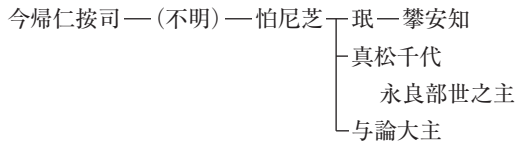
以上、三つの文献資料の記述内容から、沖永良部島では、北山王の二男真松千代が「世之主」として島を統治したこと、北山滅亡時に沖永良部世之主は自害したと伝えられてきたこと、世之主在世中から「城籠（シニグ）祭」が三年に一度行われていたと伝承されてきたことがわかる。

「世乃主由緒書」は、世之主を北山王の二男真松千代と記しているが、沖永良部島ではどの北山王の子であったと考えられてきたのであろうか。『知名町誌』は有川董重氏の説として次のような北山王統の系図を掲載している<sup>10)</sup>。



また、『和泊町誌』は次のような北山王統の系図を掲載している<sup>11)</sup>。





これら町誌の記述から、沖永良部島では、沖永良部世之主真松千代は北山王帕尼芝の二男であったと考えられていることがわかる。ただし、関連資料が存在していないため、事実関係は不詳である。

『中山世譜』巻四の尚思紹王の項に、明の永楽十四（一四一六）年丙申に北山王攀安知を攻め滅ぼした時の様子が記されている。また、その項の末に「附」として「山北王」の系譜についての簡略な記述がある。

◆『中山世譜』巻四の尚思紹王の項「附」

山北王。／今帰仁（在位年数不詳）／帕尼芝（在位年数不詳）／珉（在位五年）／攀安知（在位二十一年）／起元、延祐年間。尽明、永楽四年丙戌。／凡四主。歴九十余年。<sup>12)</sup>

この記述のうち、明の永楽四（一四〇六）年丙戌に滅亡したという部分は、永楽十四年丙申の項に北山を滅ぼしたとある部分の末にある記述であることから、永楽十四年丙申の誤記とみてよいであろう。この系譜によると、北山は元の延祐年間（一三一四～一三二〇）から今帰仁按司某—帕尼芝—珉（在位五年）—攀安知（在位二十一年）と続いたが、明の永楽十四（一四一六）年丙申に四主九十余年で滅亡したということになる（ただし、『中山世鑑』巻三の尚巴志の項には、北山を滅ぼしたのは永楽二十（一四二二）年三月のことと記されている）。北山の三王（帕尼芝、珉、攀安知）は、明国（一三六八～一六四四）と交易していたことが知られている<sup>13)</sup>。

北山王統が四主九十余年で滅亡したとすると、初代今帰仁某の即位年は一三二〇年頃ということになる（元の延祐年間末の一三二〇年頃即位と仮定して計算すると九十六年間で滅亡したことになるので、一三二〇年頃かその数年前あたりが即位年だったとみられる）。二代帕尼芝は「在位年数不詳」なので即位年がわからないが、一三八三年に明へ進貢しているので、少なくとも一三八三年以前～一三八九年頃まで在位したとみられる。三代珉は「在位五年」とあり一三九五年に明へ進貢しているので、在位期間は一三九〇年～一三九五年頃であったとみられる。四代攀安知は「在位二十一年」で、一三九六年に明へ進貢しているので、在位期間は一三九六年から一四一六年であったとみられる。『中山世譜』に記された北山王統の系譜・在位期間を基に、明国への進貢年を参考にしつつ簡略にまとめると、次のようになる。

◆北山王統（四主九十余年）……初代今帰仁某（在位不詳1320頃-？）—二代帕尼芝（在位不詳？-1383<sup>明進貢</sup>-1389？）—三代珉（在位五年1390？-1395<sup>明進貢</sup>）—四代攀

安知（在位二十一年1396<sup>明進貢</sup>-1415<sup>明進貢</sup>-1416滅亡）。

沖永良部島では沖永良部世之主は北山王の子と伝承されているわけであるが、これら北山四王のうちどの王が父王として適当なのであろうか。各王の推定即位年から計算してみると、以下ようになる。沖永良部世之主が自害した年を北山滅亡時の永楽十四（一四一六）年として父王を推定すると、初代今帰仁某（在位不詳1320頃-？）だと即位推定年の一三二〇年から計算すると世之主没年まで九十六年間となって高齢すぎて該当しない。三代珉（在位五年1390？-1395<sup>明進貢</sup>）だと即位年一三九〇年から計算すると世之主没年まで二十六年間となり若すぎて該当しない。四代攀安知（在位二十一年1396<sup>明進貢</sup>-1416）だと即位年一三九六年から計算すると世之主没年まで二十年間となり若すぎて該当しない。つまり、三代珉も四代攀安知も、自害時に子（八～五歳か）がいた世之主の父親としては若すぎて該当しないことがわかる。そうなると、年齢的な面からいえば、二代帕尼芝（在位不詳？-1383<sup>明進貢</sup>-1389？）のみが世之主の父親として想定可能ということになり、沖永良部島で世之主が帕尼芝の二男とされてきた伝承は、可能性としては十分成立するものであることがわかり、注目される。

沖永良部世之主に関する文献資料としては、十二世紀頃から十七世紀初め頃までの古歌謡を首里王府が採録編集した『おもろさうし』（全二十二巻、一五五四首、一五三一～一六二三年成立）所収オモロがある<sup>14)</sup>。『おもろさうし』には多数の沖永良部島関連オモロが所収されているが、「永良部世の主」という語があるものとしては、次の三首がよく知られている。

しよりゑとの節／一 永良部世の主の／選でおちやる能作 赤頭／百読の真絹／取て み（お）やせ／又 離れ世の主の／選でおちやる（巻十三一八六一。外間守善氏訳……永良部世の主、離れ世の主が選んでおいた芸事をやる人、赤頭部の若者たちよ、美しい絹を取って、世の主に奉れ。）

しよりゑとの節／一 永良部世の主の／御船 橋 しよわちへ／永良部島 成ちやる／又 離れ世の主の（巻十三一九三五。外間氏訳……永良部世の主が、離れ島の世の主が、お船を架け橋にし給いて交易をし、永良部島を立派な島に成したことの見事さよ。）

首里ゑとの節／一 永良部世の主の／選でおちやる 御駄群れ／御駄群れや／世の主ぢよ 待ち居る／又 離れ世の主の／又 金鞍 掛けて／与和泊 降れて（巻十三一九三六。外間氏訳……永良部世の主が、離れ島の世の主が選んでおいた馬の群れの見事なことよ。馬の群は、世の主をこそ待っているのだ。世の主は馬に美しい金鞍を掛けて、与和泊にお降りになったのだ。）

これら三首のオモロから、沖永良部島にはかつて「永良部世の主」と称された有力者が確実に存在していたらしい

ことがわかる。『おもしろさうし』には「永良部世の主」と記されているだけであるため、実在の人物であつたらしいことはわかるが、出自まではわからない。したがって、「永良部世の主」の出自は、「北山王の二男」という沖永良部島の伝承以外にてがかりが見いだせないのが現状である。しかし、地理的な問題を考慮すると、「永良部世の主」は北山と何らかのつながりがあったと考える方が、中山とのつながりを考えるよりも蓋然性が高いように思われる。

## II 沖永良部島のシニグ

本節では、沖永良部島のシニグ祭りについて検討することとしたい。残念なことに、沖永良部島のシニグ祭りは、明治三（一八七〇）年に実施されたのを最後にして廃絶された。現在の沖永良部島で聞き取り調査をしたところ、シニグ祭りが廃絶してから百五十年も経過しているため、「シニグ」という言葉さえ聞いたことがない人がほとんどという伝承状況になってしまっていた。

明治三年を最後に廃絶された沖永良部島のシニグ祭りについて、廃絶後、半世紀にあたる大正十（一九二一）年にまとめられた貴重な報告として、島伊名重氏「大正十年辛酉如月二完／維新前に於ける本島城籠祭の内容」がある（以下、「島シニグ報告」と略す）<sup>15)</sup>。これは、「明治三年午の年（大正十年より凡そ五十二年前）のしにぐ祭の実際談を聞き得たれば左に記す」と記されていることから、最後となった明治三年のシニグ祭りに参加した人から直接聞き取ってまとめたものであることがわかる。「島シニグ報告」の項目は、「しにぐ祭の由来及終局」「しにぐ祭の順序」「御使」「尻縄試」「本しにぐ祭」「与人、アンシャリの鳥廻」「初しにぐ」「当しにぐ」「西見のウツタハチブル」の順で記されており、沖永良部島のシニグ祭りの詳細を知ることのできる重要な記録となっている。

以下、各項の概略を述べる。「しにぐ祭の由来及終局」の項はシニグの由来と終局について述べている（後述）。「しにぐ祭の順序」の項には、準備から始まる順序について述べ、隔年ごとに約二十日間行われること、施行する年をシニグ年、施行しない年を神無年ということなどについて記されている。「御使」の項には、百（ひや）と呼称される首長三人の「上言」（二十四人の私共がシニグという尊い御祭の御始まりをご案内いたします、という内容）、百の衣装や馬具の装飾などについて記されている。「尻縄試（しじやたみ）」の項では、シニグ三日前に馬具及び乗馬の試験や練習を行うことについて述べている。「本しにぐ祭」の項には、本シニグについての詳細な聞き書きや、「与人旗（六人持）」「一般百姓の旗（片手持）」「衆多の旗（五人持）」「衆多の子供の初城籠旗（三人持）」などの貴重な挿絵が記されている（衆多は士族の意）。「与人、アンシャリの鳥廻」の項には、四日間の巡行経路が記されてい

る（後述）。「初しにぐ」の項には、衆多の男子の子弟が行う祭りで多額の経費がかかるという初（うい）シニグについて述べている。「当しにぐ」の項では、本シニグの一週間後に各村で行われ、やり方は大同小異であるというアタイシニグについて述べている（アタイは集落の意味）。「西見のウツタハチブル」の項では、西目で行われたウツタハチブルについて述べている。当日は西見シニグといい、当日三日前から全島の人が西見に集合してウツタハチブルを見物したという。ウツタハチブルは西見シニグの神思いといい、男装二人と女装二人（男四人）で、男二人は舟をこぐマネをし、女形二人は太鼓を合わせて打って踊り、四人で声をそろえて「ヒヤリガコウ、ヒヤリガコウ、ヒヤリガコウ、ヒイヤリ、ヤーリ。ヒイヤリヤーリ、ヒイヤリヤーリ」と面白く歌う。上城の熊里（くまと）の東（あがり）の山で始まり、稲葉の入前（いいめ）の西にあるウツタ墓の中からハチブル（仮面）をかぶって出るから「ウツタハチブル」と呼称されるという。これは、山から下りてくる仮面神で、古いシニグの形態が伝承されていたものと思われ、注目される。

島氏は「城籠」という漢字に「しにぐ」とルビを振っているが、これは、本シニグの前日夜に集まった与人三人が世之主城跡の近くにこもって夜を明かすユグマイ（夜籠）と称される行事に由来する漢字表記だと推定される。本シニグの前日夜、ユグマイ（夜籠）といって、与人三人（喜美留の主、久志検の主、大城の主）が内城の世之主城跡に集まり、大城の主は城に登る左側に「夜籠」の庵を結び、喜美留の主は上門の溜池の西方、久志検の主はその北方にこもり、翌朝のシニグ行事に参加するという（「本しにぐ祭」の項）。このことから、大城間切・喜美留間切・久志検間切の与人三人が「城に籠もる」ことが沖永良部島のシニグにとって重要な意味を持つと考えられていたことがわかる<sup>16)</sup>。

通常、琉球文化圏のシニグにおいて、こもりの神事を行う場合、例えば、「国頭村辺戸（へど）では一五歳以上の男がシニグモー（祭場）に仮設された籠り所（クムンジュ。シニグ屋ともいう）に四泊五日も籠った」<sup>17)</sup>というように、地域住民がこもるが、沖永良部島のシニグは、神人でも地域住民でもなく、統治側の与人三人がこもるところが特異な点といえよう。これは、世之主が不幸な自死をした後、子孫たちが数百年にわたって統治側の役人層として優遇されてきた伝統が背景にあり、それが与人三人がこもるという沖永良部島独特の形になったのではないかと推定される（先にみた一七一年成立「世之主に関する記録」に「其子孫の者共過半与人役相勤居申候」とある）。

「島シニグ報告」の「しにぐ祭の由来及び終局」の項に古くからの伝承をまとめた部分があるので一部を引用する（適宜句読点、傍線を付した。丸括弧内は『沖永良部島郷土史資料』による注記）<sup>18)</sup>。

しにぐ祭りは本島太古よりの大祭日にして各村首長の内有力なる一人が全島を一統したる祝祭日なりとの説もあり、又一説の口碑に世之主の母親は俗に上城の沖ヌル、実は小名久保ヌル其ヌル米が琉球へ進貢物上納の際、風采美はしく器量衆に勝れたる、琉球王の目に触れ妾となり其腹に生れしが「世之主」なり右「ヌル米」が沖繩より帰航の際には既に分娩すべき産月にて船中既に分娩の兆候ある故初め屋子母港に入港して大津勘附近にて分娩せんと企てしに、此処はしにぐ祭故そんな汚れことは御断はりだと断はられ詮方なく止むを得ずその次の島尻港にても同様断はられ止を得ず恥を忍びて下城村の下、即自己生郷の沖泊に入船上陸して下城の入間といふ、沖泊より鳥渡小名久保の行く道の傍なる現今源瑞幸氏宅の前の金森と云ふ人の屋敷の辺まで来る時に压迫せられ、其際雨中と見え雨のみにて屏風に代え、三本の石を立て籠として粥を炊きそこにて産(う)みし子が世之主がなしなりと該地の老翁等の口碑に伝えられたり。其地今に茅葺の小さき庵あり雨や日光に濡れたり又晒す時は火事又は死亡等の災難事ありといふ。／而してその世之主は七才まで西見にて成長至し七才の時琉球王の命により位に就き内城に登りしといふ。／之に依つて惟みるに分娩の時にしにぐ祭とて宿を貸さるゝに因つても窺知できるようにしにぐ祭の以前よりありしことは明々瞭々たるも其幾百年前よりありしかは詳かならず而も其終局は明治三年午年までは致し次回まで致す可き筈なりしが、明治五年よりは維新の大改革と共に難なくこの唯一絶体の神の大祭も全く跡を絶つに至れり。所謂我国武士の佩刀を解かれしと一般この大々的な現にしにぐ神と云ふものは居ると思ひし觀念が根底より破壊せられしは島民の風習として誠に美善と云ふべし併し乍らそれには二大原因あり、即ち一は多額の費用を要し、二には世の澆季に流れ旧とは今の土族即ち衆多組(しゆた)のみが大旗を立て威勢を張りしに近年までも百姓の旗は小さき竹の端に布片を結ぶ位に止まりし故しにぐ祭は侍連中の施行せし祭なりしが当地の今日四民平等の無階級といつても可なる位の社会となりしに因りしならん乎。又一方同時に与人や其筋よりの厳命なりとのことに基きしならんか。／註(一) 要するにしにぐ祭は世之主の生後島巡視の歓迎なりとの説と／(二) 分娩前に於てしにぐ祭故宿貸さぬと云うを以つて、其前よりありしこととの二説あるを記して参考資料に供す。

ここの部分には、シニグ祭りの由来と終結について記されている。シニグ祭りの由来としては、沖永良部島の古代の有力者が全島統一した祝祭日で世之主以前からあるという第一説、世之主が生誕後島内巡視したことの歓迎に由来するという第二説の二つの説があるという。この二つの説は、世之主を産もうとした母がシニグ期間中のため上陸

を断られたという伝説が事実としたら、世之主以前からあるという第一説が正しい説で、世之主生誕後島内巡視したことの歓迎に由来するという第二説は誤った説ということになる。ただし、沖永良部島の本シニグでは島内巡視が行われているので、世之主没後、世之主が島内巡視をしたことをたたえてそれを模した本シニグの島内巡視が追加されたものとみられる。

世之主の島内巡視を模したとみられる巡視行程について、「島シニグ報告」では、本シニグ祭り一日目に皆川のしにぐ塔(シニグドー)で三与人が率いる玉城方・皆川方・古里方の三隊が全員白装束で合戦のマネをし(全島民男子白装束)、それが終わると、与人三人、目差三人、時の百一人、本掟三人、城サバクイ大アンシャリ一人(女性)及びその供一人(女性)が、白装束で馬に乗って余多を経て屋者まで行って帰宅し、二日目は久志検、上平川、芦清良、黒貫、瀬利覚を経て屋子母に一泊し、三日目は屋子母、大津勘、徳時、島尻、田皆を経て西見に一泊し、四日目は田舎平、永嶺等を経て内城の世之主の御墓に参詣し、御酒を供養して豊年の兆しを計って終わると記している。本シニグの巡視行程は、沖永良部島南部地域(ほぼ知名町の範囲)を時計回りに一周していることがわかる。

シニグ祭りの終結は明治三(一八七〇)年で、次回の明治五年には実施されなかったという。「島シニグ報告」はシニグ祭りが廃止された理由として、実施には多額の費用を要したこと、明治維新の大改革で封建的身分制を廃したことが二大原因だと述べ、加えて、与人や其筋から(つまり支配層の役人筋から廃止を)厳命されたことも原因の一つかと推測している。

ここの引用で中核となる重要部分が世之主誕生をめぐる伝説である。世之主の母親は上城の沖ヌル(小名久保ヌル。「ヌル」は「ノロ」と同じ)といい、琉球へ進貢物上納の際、器量が勝れていたのが琉球王の目に触れて「世之主」を宿した。沖繩から帰航の際には産月で分娩の兆候があったため、初め屋子母港に入港して大津勘付近で分娩しようとしたが、シニグ祭り中ということで産の忌みで断られ、その次の島尻港でも同様に断られ、出身地下城の沖泊に入船上陸して下城の入間というところで産気づき、雨の中、三つの石を立ててカマド(籠)としてかゆ(粥)を炊いてそこで産んだ子が世之主であると該地の老翁等の口碑に伝えられている、という。つまり、沖永良部島では、世之主が産まれる前からシニグ祭りが行われていたと伝承されてきたことがわかる。

ここで興味深いのが、世之主の母が、屋子母港一島尻港一下城の沖泊に上陸一下城の入間で出産という時計回りに沖永良部島南部地域を半周して上陸している点である。このルートが、先ほどみた本シニグの巡視行程と半分重なっているうえ、両者とも時計回りに回っているのは、単なる偶然ではないのではないかと。本シニグの巡視行程が設定



される際、世之主の母が入島する時にたどったとされる伝承ルートを重んじて決められた可能性があるように思われる。そうであった場合、世之主の居城から始まり、世之主母の入島伝承ルートを経て、世之主の墓で終わるという本シニグの巡視行程とほぼ一致することになる。あくまで推定であるが、可能性の高い試論として提示しておきたい。

沖永良部島で世之主誕生とシニグ祭りをめぐる伝説を知っている人は現在ではほとんどいないが、平成十三（二〇〇一）年の調査ではかろうじて聞き取ることができた。では次に、和泊町内城で採集した話を提示する。

#### 〈事例1〉世之主誕生とシニグ祭り

シニグ祭りというの、一日だけじゃなくて、やっぱり、あの当時、何日か、かですよ。その時には、いわゆるケガレを、避ける。精進するわけですからケガレを避ける、そういう意味があってお産はやっぱり血を流すからいうて嫌うわけですよ。（世之主の母は）最初はその、今の住吉の、港にしたら向こうもシニグ祭りで、だめでこう回って、回り回って、着いてきたということですけども。家にも入れないということで、それがこないだ話した遠江という人の、花沖神社の関係、遠江という人の、物語に出てきたあれですけども。我が家にも入れられないということで、とうとう産気づいて、今の、神社の、上城（下城の語り違い）の世之主神社の、中に、小屋作って、産んだということですけども。

それが、ウワマ石いうてあの、石を三つこう、今、カマドというのは綺麗なカマドじゃなくって、石を三つ重ねてその間にこう、なべ（鍋）をかけるというのが、その石のことを、いってるんですよ、ウワマ石ちゅうのは。それが、ご神体になってるちゅうことで。そこで、産湯を沸かしたカマド石だということで、それがご神体になってるということで、聞いていますけどね。<sup>19)</sup>

〈事例1〉は、世之主の母がお産をしようと住吉港に上陸しようとしたが、シニグ祭り期間中のため産の忌みで断られ、回り回って、今の下城（上城は語り違い）の世之主神社のところに小屋を作って産んだという語りである。お産の際に石を三つ重ねて鍋をかけて産湯を沸かしたといい、その時に使用したウワマ石（カマド石）がご神体になっているという。なお、〈事例1〉の話者が語っている、花沖神社関係の遠江という人の物語とは、知名町新城にある花沖神社（昭和三年創建。世之主の生母が祭神）の創建に尽力した遠江マゴ氏が八十歳で亡くなる直前の昭和三十年八月に口述したという世之主伝承をさす<sup>20)</sup>。この遠江マゴ氏の口述では、世之主の母が実家で産ませてもらえなかったのは、北山王の子と信じてもらえずタビチュウ（他所者）の子だと思われて勘当されたからだである。

次に、知名町下城の世之主生誕地で採集した話を提示する。

#### 〈事例2〉世之主の誕生

世之主さんが生まれたのはね、この付近だけどね、もううちの親父が言うたのは、あそこに生まれた、向こう側で生まれた言うたりこっちで生まれた言うたり、ほんでこっちで生まれた言うたりねえ。ここで、物知りとか何とかいうのあれに、聞いたら、その方々によってここ言うたりここ言うたりしよった。最後にはもう、ここ言うてここに神社造ったわけよ。向こうに。そこはうちの土地だけどね。

世之主さんはね、向こうの、家の、方が、昔は貢物（ぐむち）いうて、米、持って、沖縄に税金みたいに持って行きよた。それを持って行く時にこの、世之主様の、お母さんが、ついて行ったらしい。へえたら今度は向こうの、北山王、あの方に見初められて、あそこで、子を身ごもったらしいわ。それが今度こっちに帰って来たから、自分の家では産めなくて、もう産み月になってから今度はここで産んだ。すぐ向こうに家があるのよ。そこではもう産めなくて、ここで。（実家に）入っておったけど、産み月になってからかも分かんよ。産んだのはね、蓑（みの）、昔の蓑（みの）いうのをね、着とって産んだいうて。そういうけどね。うちの親父が、ようそんな話、しよったけど。

だから、向こうから、こう、道があったけどね、小さな道が。どっかの家に、親戚があつて、向こうからこっちへ行く途中で産んだかも分かんよ。そうではないかなあと思うけどね。あの、わざわざ家から出るということは、もう、あれだけど、そうではないかなあ思うけどね、向こうからこっちに。ようこの、そこを、通りよったらしいよ昔の人は。だからよ、出されることは出された。出されたら、どっかの家で産むのが本当だけど、家の無い所で蓑（みの）着て産んだとか言うからね。そうではないかなあ思うけど。<sup>21)</sup>

〈事例2〉は、税金を納めに琉球へ行った時に付いていた娘が北山王に見初められ、身ごもったため帰島して子（世之主）を産もうとしたところ、親に反対されて実家では産めず、家の無い所（今のニューマ屋敷の地）で蓑（みの）を着て産んだという話である。〈事例2〉の話者は、生まれた時からずっと屋号「ニューマ屋敷」に住んでいるということであった（この「ニューマ」は、「島シニグ報告」の「しにぐ祭の由来及び終局」の項に下城の「入間」と表記されている）。世之主の母は、親に反対されたため、家の無い所で蓑（みの）を着て産んだという。ここでは、雨が降っていたため蓑（みの）を着ていたと語られているが、霜月の寒い日に蓑を着て産んだと語られる場合もあるようである。興味深いのは、物知り（ユタ）たちの指摘が人ごとに違うため、世之主の生まれた場所がなかなか特定できず、最後にやっと場所が決まって、そこに今の神社が建てられたという部分である。ニューマ屋敷の地で産まれたという古い伝承があった場合でも、その地の中でさらに生誕地点を絞ろうとした時に、複数の物知りたちがその絞

込み作業に動員されたということがわかる。現在、世之主が産まれたとされるニューマ屋敷の地に下城の世之主神社が建立されている。

沖永良部島のシニグについて、柏常秋氏は以下のように説明している（傍線を付した）。

〔シニグ祭〕この祭典は、三年毎に一回、七・八月頃の乙酉の日に行われた。本シニグとアタイ（部落）シニグとの二部に分れ、四日に亘る本シニグを終えた後、一週間を経てアタイシニグを行う定めであった。／第一日は、未明より内城部落にある、「世の主」の居城跡に於て祭典が行われる。前夜より山麓に籠居していた三間切の与人三人は、この祭典に加わつて下山し、そこに待機している随行者の乗馬隊を率い、六人がかりの与人旗を先頭に押立て、皆川部落のシニグドロー（広場）に集結（男女全員、白装束で騎乗）、ここで再び祭典を行つた後解散し、与人三人・祝女一人・その他役員十数名が一団となつて村落の巡遊を始める。／この日各村落でもそれぞれ一定の場合に集つて祭典を行つた。上流社会の男児で、初めてこの祭典に逢うものは、大人に抱かれて騎乗し、三人で擁立する旗幟を先頭としてこの祭典に参加し、これを初シニグと称した。祭典後盛宴を開き、歌舞音曲を行つて夕刻に及んだ。／村落巡行の一隊は、第二・三日も巡行を続け、第四日には「世の主」の墓所に参詣して本シニグを終る。この日より七日目に当る子午の日にアタイシニグが部落毎に行われるが、その行事内容が祭典に始まり、酒宴に終ることは初日と異なる。／シニグ祭の期間中に喧嘩口論する者は神の怒に触れて、三年以内に不祥事に見舞われるものと信じられていた。妊婦・産婦の外出は禁忌されていたけれども、死者のあつた場合には、親子の間柄でも死体を隠蔽して祭典に参加しなければならなかつたと伝えられている。<sup>22)</sup>

この柏氏の説明は「島シニグ報告」を基に聞き取り等で補足したものとみられる。沖永良部島のシニグ祭について、三年毎（隔年）に一回七・八月頃の乙酉の日に行われること、本シニグは四日間行われ、その一週間後にアタイシニグが部落毎に行われること、行事内容は祭典に始まり酒宴に終ること、シニグの期間中に喧嘩口論する者は不祥事に見舞われると信じられていたこと、妊婦・産婦の外出は禁忌されていたこと、死者があつた場合は親子の間柄でも死体を隠蔽して祭典に参加しなければならなかつたことなどについて述べられている。

本シニグでは三間切の与人三人が前夜から山麓に籠居し、一日目には与人三人が内城の世之主居城跡での祭典に加わり、乗馬隊を率いて六人がかりの与人旗を先頭に立て、皆川部落のシニグドローに集結して祭典後解散し、与人三人・ノロー一人・その他役員十数名が一団となつて村落巡遊を始め、二・三日目も巡行し、四日目に世之主墓所に参詣して終わるといふ。男女全員、白装束で騎乗したとあ

るから、かなり勇壮で厳かな祭事であったことがわかる。また、上流社会の男児が初めてこの祭典に参加するのを初シニグと称したということであるから、沖繩本島北部地域の「シヌグ」と同様に、沖永良部島のシニグは男の祭りであったことがわかる。

柏氏はこの説明の続きとなる部分で、シニグ祭の祭神に関する三説について述べている（引用は割愛した）。第一は世之主説であるが、シニグ祭の最中だったので妊婦の上陸は不浄だという理由で拒絶され、入間で産んだという伝承があるので明らかに誤りだとしている。本シニグは世之主在世中の島内巡行の光景を模擬して祭儀に添加したものだということが祭儀内容から容易に理解できると述べている。第二は大島の開闢神「志仁礼久」説であるが、「シニグ」と「志仁礼久」との語音が近似しているのを根拠としているようだとしている。第三は沖繩で強調されている海神説であるとし、「琉球国由来記」に「辺戸<sup>ノ</sup>巫火神のシノグ折目」には「海神祭祀也」と注してあり、高離島<sup>たかはなれ</sup>「シノグ祭」のおたかべの一節に「ニライ・カナイ」とあるから稲種をもたらしたと信じられていたニライの神であったかも知れないと述べている。なお、柏氏は「シニグ祭」の項で、「シニグ」と「シニグ」の二つの表記を使用している（沖永良部島内でも、「シニグイ」「シニグ」など微妙に呼称が違っていたようである）。

宗岡里吉氏は自身の祖母からの聞き取りを基に「しにぐい祭り」についてまとめている（「島シニグ報告」を参考にしつつ先人たちからの聞き取りを加えてまとめたことがうかがえる）。その中に「慶応二年生まれの小生の祖母はしにぐい祭りに参加したとのことでこの盛大なお祭りで、おどったり、はねたりの所作、しわざを、自分で実際にやって見せてくれました。／お題目のオーエ、オーエ、オーエ、フーエに調子をあわせて、両手を胸の真中あたりで力強くパチンと音を立て、打つと同時に両手は合掌のまま天空高く差し伸ばします。これをくりかえしやっているうちに熱狂するとのことでした。」と記された部分がある<sup>23)</sup>。宗岡氏の祖母は慶応二年（一八六六）生まれとあるから、明治元年（一八六八）満二歳時と、明治三年（一八七〇）満四歳時の二回、シニグを経験したらしいことがわかる。満二歳では幼すぎるので、宗岡氏の祖母の記憶は、明治三年満四歳時に参加したシニグの体験によるものと思われる。その時の踊ったり、はねたりといった体験がよほど楽しかったようで、かなり鮮明に記憶していたことがうかがえる。宗岡氏の報告からは、シニグ祭の時に、大山の東山崎から瀬利覚の「しにぐい堂」（シニグドロー）まで、神が通る「しにぐい道」（シニグ道）があつたことなど瀬利覚集落でのシニグ祭の実際が良くわかり、貴重な資料となっている。

下野敏見氏は、昭和四十年代（一九七〇年前後頃）に沖永良部島全集落を調査して論文をまとめているが、その中



にシニグについての項目がある<sup>24)</sup>。氏が「本島のシニグ祭りは、明治三年に絶えて以来一〇〇年余になるが、今日全島を廻ってみてその全貌はおろか片鱗さえも話のできる人は非常に少ない」と述べているように、この調査が行われた時期はシニグが廃絶されてから約百年後にあたる。この論文には、喜美留、住吉、瀬利覚、上平川、赤嶺、芦清蘆（良カ）、和、畦布、玉城、久志検、国頭、余多、皆川、徳時、出花、田皆、知名、屋子母、後蘭、正名などの集落の、シニグドウ、シヌグ石、カミミチなどについての断片的な伝承が記されており、貴重な報告となっている。残念なことに、下野氏の調査から半世紀経過した現在では、さらに伝承が薄くなっている。

先田光演氏は、沖永良部島のシニグ伝承について、下野氏の調査から約十年後の昭和五十二年と五十五年沖永良部島の全四十二集落の約半数を調査して論文にまとめている<sup>25)</sup>。この論文には、国頭、西原、喜美留、出花、上手々知名、畦布、玉城、後蘭、皆川、古里、住吉、大津勤、屋子母、瀬利覚、芦清良、屋者、上平川、竿津、黒貫、余多、赤嶺、下城、田皆、正名、徳時、知名などの集落の、シニグドー、シニグ石、シニグ道、シニグアシビなどについての断片的な伝承が記されており、貴重な報告となっている。シニグについての伝承が聞き取れなかったのは、下平川、小米（新設集落）、久志検、新城・下城（古称ニシミ内）とのことであるから、かつては基本的にほぼ全集落でシニグが実施されていたらしいことがわかる。先田氏は沖永良部島のシニグには「第一期 古シニグ祭」「第二期 世の主時代のシニグ祭」「第三期 薩藩治下のシニグ祭」という三段階の変遷があったと推定しており、「古シニグ祭の姿はこの各シマ毎のアイシニグが原形と考えられる」と述べている。

次に、和泊町内城で採集した語りを提示する。

#### 〈事例3〉シニグとほら貝の合図

シニグというのは、当て字かな、城籠て書いて。城に籠もるいうて。ここでもやっぱり、片仮名で、シニグちて書いていますね。そのシニグの時には、各集落、いわゆる軍隊式に、軍隊でしようかなあ、各集落の方に寄って、一つのこう、知らせちゃうかなあ、連絡によって。昔はこの島の、今の放送施設みたいな、あれと代わるやつは、ほら貝だったんですね。何か、一番でほら貝が鳴ると、それを合図に、各集落から（内城の世之主）神社へ向けてこう、登城すると。だから、軍事訓練みたいなやつじゃないかなあという、感じがするんですけど。（シニグドーは）各集落にこうあるみたいです。だからそこで、何か教練みたいなのをやっぱりやりよったんじゃないかなあという、感じがすけどね。皆川にもありますし。原っぱだったんですよ。「トー」というのは、原っぱの「原」。原っぱという意味。「広場」ですよ結局ね。トーの跡というのは皆川に何かあれが、立ってますね、シニグ跡、ドー跡ちゅ

うて。だから、そこが今の、シニグドーのそこが、古里の与和浜から、今の中寿神社あたりの、今の皆川あたりにこう続いて、きてるんじゃないかなあと思うんですね。

ただシニグドーというのは、自体はさっき言ったように、集落の。やっぱり、その、集落、集落にやっぱり、長（おさ）がおったでしようから、その人たちが、集合して、登城する、場所じゃなかったろうかなあと思いますね。一つの軍事教練みたいな考え方でいけば、なるほどなあと感じますけどね。

だからそのへんに、やっぱり、連絡、見晴らしというんかなあ、それができる所が、あるんじゃないかなあというふうに思ってるんですけどね。シニグドーとはもう、別途ですけども。<sup>26)</sup>

〈事例3〉は、シニグの時に一番でほら貝が鳴ると、それを合図にして、各集落から長（おさ）が内城の世之主神社（世之主城跡）へ向けて登城したという伝承を語っている。これは「本シニグ」に関する伝承だとみられる。「島シニグ報告」の「本しにぐ祭」の項に「ときの声を上げて旗を振りつゝ、「オホエオホエオホエオホエウフエー」と云ふ合図をなす」「擬戦の如くにて大（太カ）鼓を鳴らしつゝ、其「バチ」にて頭や胴などなぐり合もする由である」等、ときの声や太鼓を鳴らすという記述はあるが、「ほら貝」を鳴らして連絡したという記述は見当たらないので、貴重な伝承となっている。〈事例3〉の後半に、「皆川」の「シニグドー」、「軍事教練みたいな」という語りがあがるが、これは、「島シニグ報告」に「而して最初各隊を率ゐて皆川のしにぐ塔に来て会合をなす」「現代の司令官の各隊を引率して戦場に赴く時は斯くもあるかと俣ばれる」と記されている状況説明と共通するので、これも本シニグにまつわる伝承だとみられる。「皆川」のシニグ伝承について、先田論文では「シニグ道を馬に乗った人が通って行ったという。玉城の溜池のシニグドーと皆川のシニグドーを乗馬した人々が往来した。」と記している。シニグ道はカミミチで、シニグの時だけ通る道ということなので、馬に乗った人が通って行ったというの、シニグ実施時の状況を説明した伝承らしいことがわかる。

次に、和泊町国頭で採集した「シニグ祭り」と国頭のシニグドーについての語りを提示する（国頭では「シニグ」と呼称する）。

#### 〈事例4〉シニグ祭り」と国頭のシニグドー

シニグ祭りちて。今もその石が残ってるの。シニグドー。シニグ祭りした。長あい竿に、旗をぶら下げて、内城（うちじろ）の世之主神社から見えるように、国頭で身体が一番大きい人が、その、シニグ祭りする時にゃ、「チチャギリソークブ、チチャギリソークブ」という、歌いながら、その竹の筒を、上げたり下げたりして、踊りしたみたいです。そのシニグドーは、世之主神社から見えるみたいです。高い竹竿上げて、「チチャギリソークブ、チチャギリソーク

ブ」と言いながら、みんなにはや（囃）されとった。それを持ち上げて、シング祭りをしたらしいです。ソークブという人は、名前です。チチャギリは、竹竿で、上げたり下げたりする時に、突き上げて落とせ突き上げて落とせという、意味です。<sup>27)</sup>

〈事例4〉は、シング祭りの時は長い竿に旗をぶら下げ、内城の世之主神社（世之主城跡）から見えるように、国頭で身体が一番大きい人が、「チチャギリソークブ、チチャギリソークブ」と歌いながら、その竹の筒を上げ下げして踊ったらしい。ソークブは名前、チチャギリは突き上げて落とせという意味で、国頭のシングドローは世之主神社から見えるらしい。国頭のシングドローには今も石が残っている、という語りとなっている。

#### 〈事例5〉シング祭り国頭のシングドロー

小学生六年の時に、詳しいというか、先生から話は、ちょっと聞いたことがあります。なんか、まとい（纏）を持って、シングドローっていうんですが、その場所に御影石があるんです大きな。五、六個ぐらいありますが、その一番高い石の上に乗って、まといを持って、なんか、「チチャギリソークブ」とか言って、しよったそうですがね。なんか、タナクボソークブというおじさんが、そのまといを持つ役目をしとって、その石の上で、しよったらしい。竿の先にはなんか、付いてたんでしょ。「チチャギリ」ってのは、こう上に突き上げなさいっていうことです。<sup>28)</sup>

〈事例5〉は、小学生六年の時に、詳しい先生から話を聞いたことがある。まとい（纏）を持って、シングドローに五、六個ぐらいある大きな御影石の一番高い石の上に乗って、まといを持って、「チチャギリソークブ」とか言って、していた。タナクボソークブというおじさんがそのまといを持つ役目をしており、その石の上でしたらしい。「チチャギリ」は上に突き上げろという意味だという語りとなっている。

#### 〈事例6〉シング祭り国頭のシングドロー

構造改善しても、その（シング）石はまだありますよ。「じゃらんじゃらん」もう。シング祭りいうてしよった。その時はもう「じゃらんじゃらん」、鳴るものを、引いたりして来よったってそこ。そこは休憩場所とか言うてたけど。どこまで行きよったかな。その人たちの休憩場所って石は。「チチャギリソークボ、チチャギリソークボ」いうて。「シング祭り」とか言よったけど。シング祭りしよったところの周辺には、シングドローゆう地名。<sup>29)</sup>

〈事例6〉は、シング祭りをする時は「じゃらんじゃらん」と鳴るものを引いたりして来たという。シング石のある所は休憩場所とか言うていた。「チチャギリソークボ、チチャギリソークボ」と言った。シング祭りをしたところの周辺はシングドローという地名になっているという語りとなっている。

「シニグ」の呼称については、国頭の話者は三名とも「シ

ング祭り」「シングドロー」と呼称していた。詳しい先生から話を聞いたという〈事例5〉の話者は昭和十四年生まれなので、小学生六年の時は昭和二十六年頃になる。〈事例6〉の話者（昭和十一年生まれ）も小学生の時に先生から聞いたということなので、昭和二十年の国頭小学校にシング祭りについて話して聞かせた教員がいたようである。それから八十年近く経ってもその時に聞いた話を「チチャギリソークブ、チチャギリソークブ」と言ったらしいと節をつけて楽しそうに語ってくれたので、百五十年前に行われたシング祭りの記憶が表現豊かに語り継がれてきたことがわかる。

下野氏の報告には「国頭（くにがみ）では国頭小学校の南側の丘に黒石が何十本もあったが、そこでシニグ祭りをした。」<sup>30)</sup>とある。〈事例6〉の話者が「構造改善しても、その（シング）石はまだありますよ」と語っているように、現在でもシング石がシングドローに残されているが、大きな黒石は何十本もなく数個あるだけとなっている（かつて何十本もあったという伝承は確認できなかった）。

先田氏の報告には「国頭、夜中に馬に鈴鞍をかけた人が、ビシの岬からミンジチ溜池の南側を通り、シングドローで勢揃してナーゴヤマ（上手）を経てグシクの城に行ったという。／シニグ年には、部落民がシングドローに集まってチチャギリソークブという踊をした。」<sup>31)</sup>とある。〈事例6〉の話者が「じゃらんじゃらん」と言っているのは、馬にかけられた鈴鞍が鳴る音についての説明であつたらしいことがわかる。おそらく〈事例6〉の話者は、「じゃらんじゃらん」と鳴る鈴をつけた馬を引いてシングドローに来てそこは休憩場所にもなっていたので休憩したらしいよ、などという語りを小学生の頃に聞いたのであろう。

『国頭字誌』に「しにぐ祭り」は、サチ原に降り立った神々が、白馬にまたがり、部落内を通り、シングドウで、天に昇ったと伝えられ<sup>32)</sup>と記されているので、シング祭りの時に鈴鞍をかけた馬を引いてシングドローに行ったという行動は、白馬にまたがった神々の行列を再現しようとしたものかもしれない。

「チチャギリソークブ（ボ）」に関して、『国頭字誌』には「シングドウで行われたシニグ祭りには、うふや旗（川嶺竿窪氏の先祖方）と上がり旗（佐々木寅之助氏の先祖方）の両雄が出て神様の前で、旗を突き上げて、その覇を競ったという。「ちちゃぎり竿窪」というはやし言葉はまだ耳新しい。／現在のウヒヤ（福嶺家）の先祖は川嶺家であり、川嶺家は琉球服属時代に登場する国頭弥太郎の後胤であると系図に示されている。／これらのことから、国頭の按司は川嶺家の先祖で現在の福嶺家の先祖であったであろう。」<sup>33)</sup>と記されている。つまり、「チチャギリソークブ（ボ）」の「チチャギリ」は上に突き上げろという意味で、「ソークブ（ボ）」はうふや旗を持った川嶺竿窪氏（同名で三代続いたという）の名前「竿窪（そうくぼ）」を示

していることがわかる。川嶺家は国頭弥太郎の後胤という伝承があるということであるが、国頭弥太郎は世之主四天王の一人として知られているので<sup>34)</sup>、国頭の有力者がシニグ祭りの中核を担っていたらしいことがうかがえる。そして、国頭のシニグ祭りではうふや旗を持った川嶺氏と上がり旗を持った佐々木氏という国頭の二大有力者が旗を突き上げて覇を競ったということなのであろう。そして、内城の世之主神社（世之主城跡）から見えるように旗を突き上げたとか、馬に鈴鞍をかけた人が国頭のシニグドローで勢揃して城に行ったという伝承から、シニグ祭りで国頭勢が目指したところはやはり内城の世之主城跡であったことがわかる。

島全体にわたる基盤整理や道路工事等のため、各地のシニグドローやシニグ石は次第に姿を消しているようである。

次に、知名町芦清良で採集した語りを提示する（芦清良では「シニグ」と呼称する）。

#### 〈事例7〉 芦清良のシニグドロー跡

シニグドロー、もうないんじゃない。あの畑でしょ。もうこの耕地整理で、どうなってるかねえ。畑のことでしょ。みんな耕地整理したから。もうどこかわからない。（中略）うちなんかも知らないもう時代は。そこで遊びをしようたらしいけど。もうぜんぜん形は跡形もないもん。もう耕地整理で何にもわからない。その通りあった道もないんじゃないもう。<sup>35)</sup>

#### 〈事例8〉 芦清良のシニグドロー跡

シニグドロー、シニグドローはもうない。シニグドロー。この中間あたりだったと思うけどね。昔あった。（シニグをここでしていたのか？）「シニ」じゃない、「シン」だ。（今は）跡形もない。（シニグ祭りについて聞いたことがあるか？）いやあ、聞いたことない。これはそこ昔ね、大昔。もう私の時は、そこでは何もしてなかった気がするなあ。広場だった、そこは。（昭和時代に整地したのか？）そうだよ。基盤整理で、してるよね。だって、その頃は、広っぱはそこしかなかったから、そこで何かあったんだろうとは思うんだけど。もう今は、広っぱどこでもあるし。（昔は畑だったか？）まだ、田んぼ。ここあたりはみんな田んぼですよ。（今も田んぼか？）いや、田んぼはしてない。基盤整備してもう畑にしてあるからね。（田んぼの中にシニグドローがあった？）そうそうそうそう。広場。ちょっと上がってたからね。小高い。だいぶ上がったと思うよ。私がねえここ通った時は、ちょっと上がってたんじゃないかな、こう、こんもりと。その広っぱだけ。その他は全部田んぼだったから。共有地でしょうねえ。今は基盤整備してるからもう誰かの土地になってる。ここに、新しく公園が造ってあるから、（共有地は）そこになったんじゃない。向こうと交換して。<sup>36)</sup>

〈事例7〉 〈事例8〉は、芦清良のシニグドローについての語りである。大正十三年生まれの〈事例7〉の話者によ

ると、自分が知らない時代にはそこで遊びをしていたらしいが、耕地整理でシニグドローは跡形もなくなっており、昔の道もないということであった。最後のシニグ祭りが実施された明治三（一八七〇）年から話者が生まれた大正十三（一九二四）年まですでに五十四年経過していたということで、〈事例7〉の話者はシニグ祭りについてあまり聞く機会がなかったらしいことがうかがえる。昭和二十八年生まれの〈事例8〉の話者も基盤整理で今は跡形もないと語ってくれた。シニグをここでしていたのかと質問したところ、「シニ」じゃない「シン」だと訂正された。昔は田んぼの中に小高い広場があり、そこをシニグドローと呼称していたというが、今は基盤整備をして畑になっているということであった。子どもの頃はそこで遊んだ気がするが、シニグ祭りについては聞いたことがないと語ってくれた。

下野氏の報告には「芦清蘆（良カ）（あしきよら）ではシニグドローは共有地になっている広場である。昔、清利覚の上の山の東山崎に各村落代表が馬で集まり、琉球政府の祭政事項の達示があり、それがすむと馬に乗って村落へ帰った。村落民が途中で迎え、芦清蘆（良カ）の拝み山で代表者の報告が行なわれた。その後、シニグドローで村落全員に伝達した。人びとはミショウをたくさん造ってシニグドローで飲酒歌舞し、闘牛も行った。旧八月一五夜にした。」<sup>37)</sup>とある。この記述から、濃密な伝承があるかと期待して調査に入ったが、残念なことにシニグ祭りそのものの伝承が消滅していた。「拝み山で代表者の報告が行なわれた」とあるので拝み山はどこにあるかを〈事例8〉の話者に聞いてみると、拝山神社のところが拝み山だと教えてくれた。芦清良のシニグドロー跡の近くの丘に建っている拝山神社の前にある看板に「拝山は、尊崇の山として守り続けられた大木繁茂の山であったが、島嶼制が施工（行カ）された頃、（中略）石灰焼の薪にするため拝山の太木を伐採してしまった。第二回目の伐採は大正五年～六年（一九一六～一七）年頃、自家用酒造所を各部落に建てることになり、残る中小木を伐採したため荒廃状態となった。」と記されていることから、二回にわたって伐採が行われたらしいことがわかる。一回目は島嶼制が施行された頃とあるので、明治四十一（一九〇八）年の沖繩県及島嶼町村制の施行により和泊村・知名村が成立した頃で<sup>38)</sup>、二回目は大正五～六（一九一六～一七）年頃だということ。この二回にわたる伐採で大木繁茂のカミ山が現在のはげ山になったことがわかる。伝説はその地のモノと結び付いて語られるので、伝説の核となるモノが無くなると、その伝説は急速に衰微してゆく。明治・大正期に拝山にあった大木群が伐採されてカミ山がはげ山になってしまったことや、戦後の基盤整理で芦清良のシニグドローが無くなったことは、芦清良のシニグ伝承を衰微させる要因の一端となったように思われる。

次に、和泊町後蘭で採集した語りを提示する。

#### 〈事例9〉 後蘭のシニグ石



(後蘭の一番高いところは?)この辺だと、この上の、ちょっと坂の、ちょうど登ったあたりぐらいでしょう。(そこにシニグ石はあるか?)いやあ。あっ昔あれがそうか。これの今のこの、新しい道は昔は旧道でね、要するにけもの道で、私学校に行くのに近道でね、だからその、石の上を登ったり、自転車も通れないような道があったんです。その両サイドに、岩はあったなそういえば。大きな岩あった。ああそのことかな。今はないです。この道路がね、できたもんだからもう今はそれはないです。子どもの頃にそこを通る時にはね、もう自転車も通れないぐらいの段差があったり、そういうところ。要するにもう、一人一人が歩いて行けるぐらいの。学校に行くのに近いもんですから、ちゃんと正規のルートじゃなくてそこを通りよったんですね。ああそういえばその上に石があったな。<sup>39)</sup>

〈事例9〉は後蘭の一番高いところにあった石(シニグ石か)についての語りである。昭和十九年生まれの話者が子どもの頃、細い旧道を通して学校に行く時、後蘭の一番高いところに大きな岩があったという。道路工事で地形が全然変わっており、その石はもうないそうである。

下野氏の報告には「後蘭ではシヌグの神は恐ろしい神で、その通り道は怖れられた。その道は今もある。後蘭の上の山の石をシヌグ石といい、そこに旗を立てた。そこは沖永良部島全体が見渡せる地であった。馬に乗って沖永良部島中を廻り、村々へ帰った。帰途、後蘭ではソンジのブスという所に待ち受けてミショウを飲ませた」<sup>40)</sup>とある。つまり、後蘭で一番高いところにシニグ石があり、シニグの時はシニグ石に旗を立てたということなので、〈事例9〉の話者に後蘭の一番高いところはどこで、そこに大きな岩があったかを聞いたところ、子どもの頃に細い旧道を通して学校に行く時、確かに大きな岩があったと答えてくれた。〈事例9〉の話者はシニグ石という言葉聞いたことがないということであったが、周辺の状況から考えて、〈事例9〉の話者が子どもの頃に見た岩が後蘭のシニグ石であった可能性がある。もう一つ、ここと少し離れた高い場所にシニグ石があったのではという説があり、現時点では判断できなかった(後考を俟ちたい)。

下野氏が調査した昭和四十年代(一九七〇年前後頃)にはシニグやシニグ石の伝承が残っていたようであるが、それから半世紀の間に伝承はさらに衰微していったようで、現在の後蘭では、道路工事でシニグ石は無くなり、シニグについての伝承もほぼ消滅していた。先田氏の報告に「シニグ祭には島中の人々が馬に乗って後蘭に来た。」<sup>41)</sup>とある。後蘭には世之主四天王の一人とされる後蘭孫八の居城跡(後蘭孫八城跡)があるので<sup>42)</sup>、シニグ祭りの時は、他地域に増して盛大に行われたものと推定される。

### III 沖永良部島のウミリ

琉球文化圏においては、伊平屋島・伊是名島のように、ウンジャミとシヌグが共に行われている地域がある<sup>43)</sup>。このことから、シニグがある沖永良部島にもウンジャミのような祭事があるのではないかと考えて年中行事を調べていたところ、沖永良部島にはウミリという祭事があることを知った。しかし、ウミリとウンジャミの関係についての文献も触れておらず不思議に思っていたが、調べを進めるうちにウミリとウンジャミの関係に触れている柏常秋氏の解説を見付けることができた。次に、ウミリについての柏氏の解説を引用する(傍線を付した)。

〔ウミリ祭〕毎年陰暦十月の望の頃に行われるが、その期日は、各村落必ずしも一致していなかった。三日連続して、第一・二日は夜間晩食後に、各家の娘又は若い主婦によつて行われ、第三日は、男女の少年によつて午前中に行われた。祭場は村落毎に一定していて、第一・二夜は村外れの、海の見える広場、第三日は海岸の巖礁の上であった。／第一夜は神祭用の御飯即ちタチヨシヤ(前出)を、第二夜は白米を供え、必ず海に向つて跪拝する。第三日は普通の御飯とお菜とを詰めた弁当を供えて祭り、終つてそれを自分で処理し、道を変えて別路より帰らねばならなかった。／第一・二夜とも、大勢の若者が集まつて来て、公然といわゆる夜遊びが行われるのであるが、殊に第一夜は、供物の直会がこれ等の若者によつて行われるために、殊の外の賑わいを呈するのが常であつた。／第一・二夜の祭儀内容より見れば、この祭典が海神饗応の性格を持つていることは明白であるから、或は、これは沖繩の北部地区で行われていた海神祭と同系の祭儀であるかも知れない。なお第三日目の祭儀には、邪霊接待の性格が強く窺われるが、これは民衆の最も恐れているシユバナ(潮花)の神を祭る儀礼が、いつしか添加されるに至つたものではあるまいか。<sup>44)</sup>

柏氏の解説では、沖永良部島のウミリ祭りは毎年陰暦十月の望(満月。十五日)の頃に行われるが期日は各村必ずしも一致していなかったこと、三日間行われ一・二日は晩食後各家の娘か若い主婦三日は男女の少年により午前中に行われたこと、場所は一・二夜は村外れの海の見える広場で三日は海岸の巖礁の上であったこと、供えは一夜はタチヨシヤを二夜は白米を供えて海に跪拝し三日は弁当を供えて祭ること、一・二夜とも大勢の若者が集まり夜遊びが行われたことなどが記されている。そして最後に、海神饗応の性格を持つので沖繩北部の海神祭と同系の祭儀かもしれないこと、第三日目の祭儀はシユバナの神を祭る儀礼が添加されたものではないかと述べている。ここのタチヨシヤは、さつまいも・米粉等を煮てこねたもので<sup>45)</sup>、シユバナの神は水死者の霊であるシバナ神を指す<sup>46)</sup>。柏常秋氏は西原出身とのことなので<sup>47)</sup>、この解説はかつて西原で

行われていたウミリ祭りがどう実施されたかを説明したものが見られる。

第一・二日は晩食後各家の娘か若い主婦、第三日午前男女の少年により行われたということから、ウミリは女性を主とする祭事らしいことがうかがえる。また、場所は第一・二夜は村外れの海の見える広場で、第三日は海岸の巖礁の上で行われたことから、「海」と関係が深い祭事であることがわかる。

先にみた下野敏見氏が昭和四十年代に沖永良部島全集落を調査してまとめた論文の中にウミリについての項目がある<sup>48)</sup>。そこには、西原（戦後すたれた）、出花、喜美留、伊延、上手々知名、瀬名（明治二十七年頃まであった）、下手々知名、国頭などの集落のウミリについての断片的な伝承が記されている。昭和四十年代には数カ所しかウミリをしていたところは残っていなかったらしい。

下野氏は、西原のウミリについて、「西原では旧一〇月庚寅の日から三日間、洗骨改葬する家もしない家も祀りをする。祀り方は、吸物、アエモノ、煮メ、御飯汁などを膳三つに入れて縁側に出して供える。三日間、これを毎日取りかえる。この時、先祖棚の前にも供えるがその時、／「ウミヤマノハチバチ、シーティ、オイシャブントウ、ウクイティタボリ（海山の初々〈初物〉）を供えて上げるから受けて下さい」／と唱える。初々はハジギの葉に盛り、神石にも供える。／昔は三日目の晩には、ウミリといい、粟飯や蕎麦ガユを重箱につめて村落の北端の、海も墓も見えるジョーバルに行き、一本の珊瑚礁の石の上に供えた。そのあと、供物を食べ、老若男女車座になって遊んだ。さらに昔はヨーガマという浜の上り口の珊瑚礁に供物をしてウミリ祭りをした。その時は、帰りは別の道を通って帰った。戦後は廃れ、ただ家で祀っているだけである。」と述べている。この記述から、柏氏の解説にある第一・二夜の祭場「村外れの、海の見える広場」は「ジョーバル」で、第三日の祭場「海岸の巖礁の上」は「ヨーガマという浜の上り口の珊瑚礁」であることがわかる。

次に和泊町西原で採集した語りを示す。

#### 〈事例10〉西原のウミリ

十五夜ゆうてな。十五夜の日の晩。十五夜やからあれ何月なるんかな。夏頃であったんちゃうかな。（旧十月）十五夜一日だけやけどな。朝でなくて晩やね。晩は、ばあちゃんたちがこしらえた、おかず持って行って、へで供えて、へでお酒とおかず持ってね。十五夜の晩です。ばあちゃんたちがこしらえた、おかず持って行って、へで、じいちゃんやらおじちゃんやらは、酒持ってな。持ってったおかずで、一杯飲んで、帰っちゃったけどな。夜ですよ。海岸のそばでな。その砂浜の中で。へで、向こうでもしょうたけどな。（西原の全員が参加したのか？）西原（にしばる）、まあ、全員とは言えないな。まあ向こう（浜）でおかずこしらえて供えて、へでお願いするのは、やっぱり、「お願

いしますは雨降らしてください」というふうな、話しでなかったかな。（神人はきていたか？）それは聞いたことないけどもね。それも、じいちゃんかばあちゃんがおったら、いろいろ話してきけるはずやけども、うちはまだその時には子どもやったから、何もわからずに、ただ、じいちゃんかばあちゃんと一緒に行って、おかず供えて、へで、じいちゃんたちはもう友だちが来とったら一杯飲んで、へで帰っちゃったけどな。まあその、何のために、向こうで供えたのかいうたら、いやこれはね、雨を降らすようお願いしてる、ような話しやったんやけどな。向こうは、ウミリゆって。名前は、どないゆったらいいかなあ、ヨウガマゆって、名前つけとったけどなあ。ヨウガマの、ウミリ。ウミリする場所やけども。ヨウガマは、上ったところの、そばやけど。向こうの名前までは、聞いたことないな。ばあちゃんに聞いたら、その（雨乞い）お願いしとんやけど、ゆうて。（いつまでしていたか？）それはもう、わからないな。もううちが、中学校卒業して、内地に出たから。（やっていたのは）昭和二十何年ぐらいうちゅうかな。小学校の時には、じいちゃんかばあちゃんと一緒に、晩行きよったけどな。その後は、どうなったのかなあ。（ウミリは）一日だけやね。<sup>49)</sup>

昭和十五年生まれの〈事例10〉の話者によると、ウミリは十五夜の日の晩に一日だけ行い、おばあさんたちが作ったおかずを海岸のヨウガマに持って行って供え、おじさんやおじさんは持って行ったおかずで一杯飲んで帰っていたという。また、西原の全員が参加したわけではないこと、おばあさんに聞くと降雨のお願いをしていると言っていたこと、自分が小学生時代の昭和二十年におじさんおばあさんと行ったことなどについて語ってくれた。小学生時代に参加した記憶しかなく、その後島を離れたのでいつ行われなくなったのかわからないということであった。先の柏氏の解説から、かつて西原ではウミリが三日間行われ、三日目は男女の少年により午前中に行われたらしいことがわかるが、〈事例10〉の話者が小学生時代に参加したのは十五夜一日だけということなので、子ども時代に参加した三日目のウミリ行事の記憶を語ってくれたことがわかる。これは、下野氏の解説にある、昔は三日目の晩にはウミリとあって、粟飯等を重箱につめてジョーバルに行き、ヨーガマという浜の上り口の珊瑚礁に供えた後に食べ、老若男女車座になって遊んだという記述と共通している。

#### 〈事例11〉西原のウミリ

（ウミリを覚えているか？）覚えてますよ。もう小さい時しか知らんから。詳しいことはちょっと。何かね、神様に、御飯ばしていて。（海岸の）岩の上に置いて。そこへ置いておくんです。夕方かな。何か神様にあげるてゆう感じやけど。何の神様かはちょっと。（そこで食べた記憶はあるか？）食べたと思いますよ。一緒に。ウミリ（とい

た)。ウミリ祭りとはいわない。(小さい頃にやった)記憶はある。どうい理由で、そういうのを神様にあげたかはちょっとわからない。<sup>50)</sup>

昭和十四年生まれ(事例11)の話者によると、子どもの頃、夕方、神様にあげるとい感じで海岸の岩の上に御飯を置いておき、その後それを食べたという。何の神様に供えたかはわからないということであった。海岸の岩とはヨーガマのことであろう。この話者は(事例10)の話者より一歳年長なので、この二人はほぼ同じ経験をしたとみられる。

次に、和泊町国頭のウミリについて検討する。

大正七(一九一八)年に国頭で生まれた西村サキ氏はウミリについて、「ウミリ祭」「ウミリ祭の日時」「ウミリ祭りの供え物」「ウミリ祭りの際の神々へのお礼の唱え言葉」「お見送り」の項目順で以下のように解説している(「」内は引用文。適宜省略し、傍線を付した)<sup>51)</sup>。

「ウミリ祭」……「島の農耕儀礼の一つに「ウミリ」という祭りがあるが、これは徳之島の「浜下り」と同様な神事ではないだろうか。／この「ウミリ祭り」は、春の種子蒔きの折りに海辺でお迎えした、「ネイリヤー」の神々が、百姓達の農作物のお見守りの任務が無事終えて、海の底の聖地に御帰りなされる時にお見送りする神事とのことである。(後略)」

「ウミリ祭の日時」……(前略)「この「ウミリ祭り」は稔り豊かな秋となり、穀物の収穫も無事終り、百姓達の家々に米俵、粟俵が満積した時に行う神事でありますから、私の祖母達の若い頃(明治の初期)までは部落中の者が一斉に取り行ったものだそうである。(中略)／私の祖母は、旧、十月の月の、甲寅(ハットウヌトウラ)の日の翌日に「ウヤフジ祭り」= (これは、その家々の御先祖への新穂祭り)を行って、それから又一週間目に「ナーマッチャー」を行い、それから三日目に、三回目の(ダウンガーマッチャー)を行っての後日の、「つちのえのさる」の日に、「ウミリ祭り」は行っていたようであるから、必ず、十月十五日と定まっていたようである。」(後略)／

「ウミリ祭りの供え物」……「春に行う播種祝いの時には、浜辺へ行って、「ネイリヤー」の神様の御来臨を仰いでから、神事を行うのであるが、この「ウミリ」祭は、すでに神様方は現世においでになっているから、春の播種祝い同様に、母屋(ウムティヤー)の縁側(ティーシ)に高膳を置き、その高膳には、「塩」「洗い米」「御神酒」「タッチョーシャー」「春の播種祝いの時に母屋の軒先(ヌチバナ)に差し込んでおいた古い「タッチョーシャー」四個と、「カマド」の上の「マッチャー」に置いてあったものも供えてから、「春の祭主が又、順を追って神事を努める。」

「ウミリ祭りの際の神々へのお礼の唱え言葉」……「ハアートウトウ、トウトウ」(かしこみかしこみ)」(後

略)

「お見送り」……「(前略)家中の者が總出で海辺に行き「ネイリヤー」の神様方のお見送りをするのである。(中略)道の辻々では、次第々々に、人数は増えて、長い行列となり、部落中の老若男女が白砂の浜へ下り、波の打ち寄せる渚まで足をつけて、携帯して来た品々を一斉に波のうねりにのせて、総勢が手を合わせる。(中略)こうして神様方とのお別れ、お見送りが、無事に終ると、今度は浜辺の白砂の上や岩場の上、芝生の上では、男衆は三味線をひき、女は歌をうたい踊りをして、その夜は部落中の者が夜通し遊び興じて、東の空が白々と明けそめる頃、「ネイリヤー」の神々のことをしのびつつ又、老若男女が長い行列をなして各家に帰ったとのこととあります。／このような神事は私の祖母(安政五年、一八五八年生れ昭和十三年一九三八年亡)の若い頃、明治の初期頃までは大変に盛んであったらしく、時、折々にその光景をよく聞かされたものである。」

西村氏の解説は、ウミリが盛んであった明治初期頃の伝承を安政五(一八五八)年生まれ(祖母)から聞いてまとめた貴重なものとなっている。国頭のウミリは、旧十月に、「ウヤフジ祭り」、「ナーマッチャー」、「ダウンガーマッチャー」の後の「つちのえのさる」の日に行っていたということなので、一日の祭りだったらしい。

西村氏は、ウミリ祭りは農作物を見守る任務のため海の底の聖地から来訪した「ネイリヤー」(ニライカナイ)の神々をお迎えしてお見送りする神事だと述べている<sup>52)</sup>。この点について、『国頭字誌』でも「この「ウミリ祭り」は、春の種子蒔きの折りに海辺でお迎えした「ネイリヤー」の神々が百姓達の農作物のお見守りを無事終えて、海にお帰りになる時に、お見送りする神事である。」<sup>53)</sup>と記しているので、国頭では「ネイリヤー」の神々をお迎えしてお見送りする神事だと伝承されてきたことがわかる。これは、ニライカナイから来訪する神を迎えて海山の幸を祈願して送るウンジャミと合致する<sup>54)</sup>。やはり、沖永良部島のウミリは、ウンジャミと同系の祭りとみてよいであろう。なお、ウミリの表記については、「海下り」「海降り」とするものがある<sup>55)</sup>。西村氏は「これは徳之島の「浜下り」と同様な神事ではないだろうか」と述べているが、「海下り」という呼称に加え、徳之島の「浜下り」と同様の部分があると考えるとこのように述べたのであろう。

西村氏はウミリ行事の実施状況について、「私が物心ついた(大正の末期から昭和の初期)頃になると、この「ウミリ」祭りも昔程ではなくなり、大分簡素化されて、浜下りの行事などは全く姿を消し、唯、年寄り達の昔物語りとなっていたが、僅かな形式だけは残っていて、その夜はタッチョーシャーを炊き野菜炒めをしてご先祖にお供えし、海の彼方ネイリヤの神様方に手を合わせる程度になって行ったと述べ、戦後になると、「ウミリ」という言葉さ



えも若い人たちには知らない者が多く、お年寄りのいるごくわずかな家庭で形ばかりのウミリ祭りが行われているだけで「時代の流れと共に、自然消滅して行くのであろうか」と嘆いている。西村氏は昭和六十四（一九八九）年にこの本を刊行しているの、国頭のウミリは昭和時代の末にはほぼ消滅状態となっていたらしいことがうかがえる。

次に和泊町国頭で採集した語りを示す。

#### 〈事例12〉国頭のウミリ

それはね、粟、麦、米なんかの初出荷する時は、それでご飯を炊いて、海の見えるところ行って、お供えして、トート（拌み）して帰る。海の見えるところ。私なんかはヒョーチューヒ、行ってしよった。それと、墓の前は海神いるから墓の前行って。うん。それを収穫する時、初出荷する時（やる）。（供えるのは）ご飯と、おかずと。（年に）何回もしない。粟と麦と、また、初採りする時、粟が豊作なったからゆって、麦が豊作なったからゆって。採れる時（やる）。日にちは決まっていなかったと思う。（女の人の祭りか？）みんな。みんなにお供えして、亡くなった人たちみんなにお供えして、「来年も豊作なしてください」ゆうお祈り。（やるのは）家ごとです。（お供えは食べるか？）食べますよ。お供えして、下げてからは。昔はもうそれ貴重品だからご飯ゆうのは。粟、麦、米のご飯は。（いつお供えするか？）朝。（潮をくんだか？）それは二十三夜（ニジュッサー）に。（いつまでしていたか？）爺ちゃんが亡くなってからはしなかったと思う。昭和五十七年に亡くなってる。また、粟や麦が、作らなくなった時からしなかったと思う。もう田んぼにみんなキビ（サトウキビ）を作るようになってからは粟や麦は作らんで、それを出荷してから刈って。<sup>56)</sup>

昭和十一年生まれの〈事例12〉の話者によると、粟、麦、米などを初出荷する時に、それでご飯を炊いて、海の見えるところにお供えして拌んで帰ったという。「墓の前は海神いるから」と語っているが、この「海神」は「ネイヤー」の神のことであろう。女の人の祭りか聞いてみると、「みんな」とのことであった。西村氏の解説にも「部落中の老若男女」とあるので、男女関係なく「みんな」で行う祭事であったととらえられていることがわかる。「家ごと」に行ったという点からは、すでに集落全体の祭事ではなくなっていたことがうかがえる。いつまでしていたかを聞くと、昭和五十七年にお爺さんが亡くなってからはしていないし、粟や麦を作らなくなった時からしていないとのことであった。〈事例12〉の話者の家でも、昭和時代の末には行われなくなっていたようである。

#### 〈事例13〉国頭のウミリ

ウミリは、海の石と潮、潮水をくんできて、ウミリ祭りという祭り、昔はやとった。潮をくんで、石ころを持ってきて、へえで、祭ったみたいです。今はしない。昭和の初め頃までやった。（自分も）やっていた。ウミリって。（小

学生の頃は？）やとった。（戦後は？）やとった。もう（昭和）三十年頃には（やっていない）。（祭りの場は？）自分の家でやった。（家ごとにやった？）ああ。（やった日は？）それはわからん。（何を祭っている？）海の神様を祭ってる。ニジュッサー（二十三夜）というのがあったり。ニジュッサー、八月二十三日。（ニジュッサーとウミリは違う？）違う。（ニジュッサーでも）潮をくんでくる。（ニジュッサーと）ウミリとは違う。（ウミリは女の祭りというか？）わからん。御馳走作って、ニジュッサーもウミリも、みんな一族が集まってって、お祝いしたの。家ごと。ほとんど本家の方でして、分家は招待されて、行って御馳走なりよったの。家ごとにしたね。海には行かなかった。<sup>57)</sup>

昭和十年生まれの〈事例13〉の話者は、ウミリでは海に行って石を拾い潮水をくんで持ってきて昔はやっていたと語ってくれた。ニジュッサー（二十三夜）は二十三夜待ちのことであるが<sup>58)</sup>、ニジュッサーとウミリとは違うと明確に答えていた。沖永良部島のニジュッサーでは海の石と潮水をくんでくるということなので、ウミリの内容と混同しているか、あるいは、〈事例13〉の話者の家ではウミリにも海の石と潮水をくんできて行ったのかもしれない。〈事例13〉の話者が子どもの頃（昭和二十年代）の記憶なので断片的な語りになっているが、その頃、この話者の家で行われたウミリでは、「家ごとにした」「海には行かなかった」とのことなので、かなり簡略化されていたことがうかがえる。

知名町瀬利覚のウミリについて、宗岡里吉氏は「明治二十七年（一八九四）頃までは、部落の行事としてウミルーという祭りが、ありました。／このウミルー祭りは、毎年旧暦の霜月（十一月）の満月の頃の五日間、部落中の老若男女が浜に下り、盛んに遊び興ずる祭りでした。」<sup>59)</sup>と述べている。これは、明治二十七年の祭りに参加したという明治十八（一八八五）年生まれ的女性二人から聞き書きをした貴重な報告となっている。夕方、家族全員で夕食を持参して浜に下りて食べ、民謡、相撲、踊りなどをして楽しく遊んだという。「毎年」、「五日間」行ったという点が特に注目される。西原の「三日間」より長く行ったということなので、沖永良部島のウミリは各集落ごとにかなり多様な行われ方をしていたらしいことがわかる。「明治二十七年」を最後にウミリが行われなくなった理由として、宗岡氏は「中止になった理由は、日清戦争のためではないでしょうか」と注している。確かに、日清戦争（明治二十七年～二十八年）のためウミリが中止されたという推測は説得力がある。下野氏が「瀬名では明治二七年頃までウミリがあった」<sup>60)</sup>と記しているの、明治二十七年頃に中止となった集落は複数あったらしいことがわかる。明治維新の混乱でシニグが中止されたこととあわせ、世の中の動向が祭事に与える影響の大きさを改めて感じさせられる。

先田光演氏は、昭和五十五年八月「現在」の沖永良部島の「ウミリ祭の実施状況」として、「五十年前」「三十年前」「十年前」「現在」の状況を表にまとめている<sup>61)</sup>。「現在」を「昭和五十五年」としてこの実施状況データを整理すると、昭和五年頃「屋者、新城、上手々知名、伊延、古里、瀬名、永嶺」実施、昭和二十五年頃「出花、喜美留」実施、昭和四十五年頃「西原」実施、昭和五十五年頃「国頭、手々知名、和泊」実施となる。しかし、その後も衰退は続き、昭和時代の末にはほぼ沖永良部島全域でウミリが行われなくなったようである。令和時代となった現在では「ウミリ」という言葉を知る人はほとんどおらず、わずかに西原と国頭くらいしかウミリを知る傳承者はいなかった。

## 結 語

以上で、沖永良部島の「シニグ」と「ウミリ」という祭事および祭事をめぐる諸問題についての筆者なりの考察を終えることとする。琉球文化圏北部地域には「シニグ」「ウンジャミ」という祭事が伝えられてきているが、沖永良部島の「シニグ(シング)」「ウミリ(ウミリー)」は、それぞれシニグ系、ウンジャミ系の祭事とみてよいように思われる。

沖永良部島には世之主と称される人物が島を統治していたという傳承があり、島の各地には世之主に関する伝説が多数傳承されている。『おもしろさうし』に名がみえる等から沖永良部世之主は実在の人物とみられるが、沖永良部島の傳承では北山王の次男だとされている。世之主は北山が滅亡した一四一六年頃に亡くなったとされているが、北山王が世之主の父親だとすると、第一・三・四代は年齢的に合わないので、第二代北山王の巾白尼芝(在位不詳?-1383明進貢-1389?)であった可能性が高い。

沖永良部島の傳承では、世之主の母が出産のために島に戻った際、シニグ期間中のため上陸を断られて入島に苦勞したとされる。宝永八(一七一一年)年成立の「世之主に関する記録」に、世之主在世時にシニグ祭りが三年に一度行われていたことが記されている。このことから、十八世紀初期にはシニグがあったことがわかるが、世之主生誕時にはすでにあったとすると、沖永良部島のシニグ祭りの成立は、少なくとも十四世紀半ば頃まで遡る可能性がある。

沖永良部島のシニグ(城籠)祭りは明治三(一八七〇)年を最後として廃絶されたが、残された記録や傳承から、シニグは隔年ごとに二十日間行われ、全島民が参加する盛大な祭事であったらしいことがわかる。「本シニグ」では内城の世之主城跡周辺で前日ユーマグイ(夜籠)した与人三人が城跡に集まり、三与人が率いる馬に乗った白装束の一行が四日間かけて島の南部地域を時計回りに一周した(世之主母の出産時の入島傳承ルートとほぼ一致する)。「当シニグ」は島の各地域ごとに行われ、古態を残す内容であ

ったらしい。「西見のウツタハチブル」では、山からハチブル(仮面)をかぶった仮面神が下りてきたとされ、古いシニグの形態が傳承されていたものと思われる。「初シニグ」は衆多(士族)の「男子」の子弟が行うことから、琉球文化圏北部地域の「シニグ」と共通している。

沖永良部島のウミリ(海下り)祭りは、かつては各集落ごとに全員が参加して、三日間、五日間と行われたらしい。日清戦争のあった明治二十七(一八九四)年頃を境に急激に衰退したようで、その後は各家ごとに行われ、昭和時代末頃にはほぼ廃絶したようである。ウミリは、各集落ごとに多様な内容で行われたらしい。三日間行われたという西原では、第一・二日は晩食後各家の娘か若い主婦、第三日午前は男女の少年により行われたということから、「女性」を主とする祭事らしいことがうかがえる。国頭では、農作物を見守る任務のため海の底の聖地から来訪した「ネイリヤー」(ニライカナイ)の神々をお見送りする神事だと傳承されている。これらのことから、沖永良部島のウミリは琉球文化圏北部地域のウンジャミと同系の祭事とみられる。

ウミリについて、先にみた柏氏は「海神祭(ウンジャミ)と同系の祭儀であるかも知れない」と述べていたが、西村氏は「これは徳之島の「浜下り」と同様な神事ではないだろうか」と述べている。おそらく西村氏は「海下り」という呼称に加え、「老若男女が白砂の浜へ下り」たことや、「男衆は三味線をひき、女は歌をうたい踊りをして、その夜は部落中の者が夜通し遊び興じ」た点に注目したため、徳之島の「浜下り」と同様な神事ではないかと考えたのであろう<sup>62)</sup>。これまで、沖永良部島のウミリがウンジャミと同系の祭儀ではないかということがほとんど言及されてこなかったのは、祭事のなかに徳之島の「浜下り」などと同様な部分があったことに加え、最も大きな原因は、戦後にはほとんど傳承が消滅しており戦後の研究者たちが調査しても全貌がつかめなかった点にあるのではないかと推定される。

本稿でみた「世乃主由緒書」(一八五〇年成立)に「北山王の儀は今帰仁城主にて琉球国の中より国頭九ヶ間切其の外、伊江島、伊平屋島、与論島、沖永良部島、徳之島、大島、喜界島迄御領分にて御座候由」とあるように、琉球文化圏北部地域のシニグ系・ウンジャミ系祭事の分布域は、北山文化圏とほぼ重なっている<sup>63)</sup>。また、沖永良部島のシニグ祭りの成立が十四世紀半ば頃まで遡るとした場合、その頃は北山統治下で中山の力は及んでいない。これらのことから、筆者は、沖永良部島の「シニグ」「ウミリ」は、琉球文化圏北部地域のシニグ系・ウンジャミ系祭事であり、シニグ系・ウンジャミ系祭事は北山文化圏を中心に行われた北山系祭事であった可能性が高いのではないかと推定している。

琉球文化圏北部地域のシニグ系・ウンジャミ系の祭事

に関しては未解明の問題が多い。与論島のシニグ・ウンジャンという祭事の検討ほか、残された問題については今後の課題としたい。

#### 注・文献

[なお、本稿の諸資料よりの引用文中、旧漢字・異体字は原則として通行の字体に改めた。]

- 1) 高良倉吉氏『琉球王国』（岩波書店、一九九三）、三九～五二頁、ほか。
- 2) 『中山世鑑』『中山世譜』の「英祖王」の項参照。
- 3) 『改訂名瀬市誌1巻歴史編』（名瀬市役所、一九九六）、一二六頁。
- 4) 『沖縄文化史辞典』（東京堂出版、一九七二）、「ウンジャミ」「シニグ」の項。島袋源七氏『山原の土俗』（郷土研究社、一九二九）に「国頭村字辺土に於ては一年越に、旧七月二十日後の亥の日に、ウンギャミ祭を行ふ。俗に女の節句だといふ。即ち此の祭はウナイウガミといひ女を拝するのである。男を拝する祭は他にシニグといふ儀式があつて、俗にウキウガミと称へてゐる。此二つの儀式は毎年交互に行はれる」（三頁）とある。原田信之「沖縄県伊平屋島の海神祭伝説」（「新見公立大学紀要」、三九、二〇一八・12）、同「沖縄県伊平屋列島のウンジャミ・シニグ伝承」（「新見公立大学紀要」、四〇、二〇一九・12）、ほか多数。
- 5) 原田信之「沖永良部島の世之主伝説—琉球王朝関連伝説をめぐって—」（「人文科学論叢」、1、二〇〇三・3、所収）参照。
- 6) 永吉 毅氏編『沖永良部島郷土史資料』（和泊町役場・改訂増補二版一九六八）。世之主に関する文献資料三種はすべて『沖永良部島郷土史資料』に所収されているが、「世之主に関する記録」と「世の主由来与人西平調書」は今日では原本の所在が不明で、「世乃主由緒書」も三分の一の七枚しか現存していない。
- 7) 玉江末駒氏「沖永良部史稿本」、注6の『沖永良部島郷土史資料』所収、一八九～一九一頁。
- 8) 玉江末駒氏「沖永良部史稿本」、注6の『沖永良部島郷土史資料』所収、一九三～一九四頁。
- 9) 「世乃主かなし由緒書 宗武重所蔵」、注6の『沖永良部島郷土史資料』所収、一七八～一八〇頁。
- 10) 『知名町誌』（知名町役場、一九八二）、一九一頁。
- 11) 『和泊町誌（歴史編）』（和泊町教育委員会、一九八五）、一八頁。
- 12) 伊波普猷氏他編『琉球史料叢書 第四』（井上書房、一九六二）、五三頁。
- 13) 『沖縄県の地名』（平凡社）「今帰仁グスク」の項に「今帰仁グスクは一五世紀初頭、中山の尚巴志に滅ぼされるまで北山王が居住・君臨した城であり、北山（ほくざん）城の別称がある。北山王は、『明実録』では怕尼芝（帕尼芝）・珉・攀安知の三王が確認される。洪武一六年（一三八三）に「山北王帕尼芝」が家臣摸結習を遣わして方物を進貢しているのが明との交易の早い記録で（同書洪武一六年一二月一日条）、同書では怕尼芝が六回（洪武二三年まで）、珉が一回（洪武二八年）、攀安知が一回（洪武二九年一永樂一三年）進貢している。北山は明から磁器や陶器などを移入し、北山からは馬や硫黄などを貢いでいる。」とある。『明実録』によると、北山王は怕尼芝六回（1383、1384、1385、1388・1月、1388・9月、1390年）、珉一回（1395年）、攀安知十一回（1396・1月、1396・11月、1397・2月、1397・12月、1398、1403、1404、1405・4月、1405・12月、1415・4月、1415年6月）、明に進貢している（和田久徳氏他『『明実録』の琉球史料（一）』沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室、二〇〇一、によった）。
- 14) 引用は外間守善氏校注『おもしろさうし（下）』（岩波書店、二〇〇〇）によった。八六一は七〇頁、九三五は一〇九～一一〇頁、九三六は一一〇頁。また、八五九は六九頁、八六〇は六九～七〇頁。
- 15) 島伊名重氏「大正十年辛酉如月二完／維新前に於ける本島城籠祭の内容」（注6の『沖永良部島郷土史資料』所収、一〇九～一一八頁）。
- 16) 沖永良部島の三間切については、『鹿兒島県の地名』（平凡社）、「沖永良部島」の項に「元禄四年に沖永良部島代官の設置に伴って改編され、大城間切・喜美留間切および久志検（ぐしきぬ）間切の三間切となったようである。」とある。
- 17) 注4の『沖縄文化史辞典』、「シニグ」の項。
- 18) 注15の島伊名重氏「大正十年辛酉如月二完／維新前に於ける本島城籠祭の内容」、一一一～一一二頁。
- 19) 話者は鹿兒島県大島郡和泊町内城の宗昇さん（昭和五年生まれ）。平成十三（二〇〇一）年八月八日・原田調査、採集稿。
- 20) 先間政明氏『沖永良部島の神社葬制墓制』（八重岳書房、一九八九）「花沖神社・知名町新城」の項参照。
- 21) 話者は鹿兒島県大島郡知名町下城の男性（大正八年生まれ）。平成十三（二〇〇一）年八月八日・原田調査、採集稿。
- 22) 柏常秋氏『沖永良部島民俗誌』（凌霄文庫刊行会、一九五四年）「年中行事」の「九月」内「シニグ祭」の項、一六八～一七〇頁。
- 23) 宗岡里吉氏『知名町瀬利覚に伝わる昔ばなし』（私家版、一九八三）、「しにぐい祭り」の項。
- 24) 下野敏見氏「沖永良部島の民俗行事」（鹿兒島短期大学南日本文化研究所「南日本文化」五、一九七二、所収。同氏『南西諸島の民俗Ⅱ』法政大学出版局、一九八一に転載）。



- 25) 先田光演氏「沖永良部島のシニグ祭と歴史」（「奄美郷土研究会報」二一、一九八一・2、所収）。
- 26) 話者は鹿児島県大島郡和泊町内城の宗昇さん（昭和五年生まれ）。平成十三（二〇〇一）年八月八日・原田調査、採集稿。
- 27) 話者は鹿児島県大島郡和泊町国頭の男性（昭和十年生まれ）。令和四（二〇二二）年八月八日・原田調査、採集稿。
- 28) 話者は鹿児島県大島郡和泊町国頭の男性（昭和十四年生まれ）。令和四（二〇二二）年八月八日・原田調査、採集稿。
- 29) 話者は鹿児島県大島郡和泊町国頭の女性（昭和十一年生まれ）。令和四（二〇二二）年八月八日・原田調査、採集稿。
- 30) 注24の下野敏見氏「沖永良部島の民俗行事」参照。
- 31) 注25の先田光演氏「沖永良部島のシニグ祭と歴史」参照。
- 32) 『国頭字誌』（国頭字誌編纂委員会、一九九五）、八頁。
- 33) 注32に同じ。
- 34) 注8の玉江末駒氏「沖永良部史稿本」、注6の『沖永良部島郷土史資料』所収、一八六頁。
- 35) 話者は鹿児島県大島郡知名町芦清良の女性（大正十三年生まれ）。令和四（二〇二二）年八月七日・原田調査、採集稿。
- 36) 話者は鹿児島県大島郡知名町芦清良の男性（昭和二十八年生まれ）。令和四（二〇二二）年八月七日・原田調査、採集稿。
- 37) 注24の下野敏見氏「沖永良部島の民俗行事」参照。
- 38) 注10の『知名町誌』、巻末「年表」、一一〇三頁。
- 39) 話者は鹿児島県大島郡和泊町後蘭の男性（昭和十九年生まれ）。令和四（二〇二二）年八月八日・原田調査、採集稿。
- 40) 注24の下野敏見氏「沖永良部島の民俗行事」参照。
- 41) 注25の先田光演氏「沖永良部島のシニグ祭と歴史」参照。
- 42) 注6『沖永良部島郷土史資料』所収「世乃主由緒書」の「註」部分に「一、後蘭孫八 但し後蘭村居住屋敷于今御座候」とある。『後蘭字誌』（後蘭字誌編纂委員会、二〇〇八）。
- 43) 注4に同じ。
- 44) 柏常秋氏『沖永良部島民俗誌』（凌霄文庫刊行会、一九五四年）、「年中行事」の「十月」内「ウミリ祭」の項、一七二～一七三頁。
- 45) 甲東哲氏編『島のことば 沖永良部島』（三笠出版、一九八七）、「タチョシャ」の項に「タチョシャ さつまいも・田芋・米粉・唐黍粉等を煮てこねたもの。稲・麦の播種祝やウミリの日の供物となる。」とある。
- 46) 注45の甲東哲氏編『島のことば 沖永良部島』、「シバナ」の項に「シバナ 陸から海に突き出た岩礁の先端。ここには水死者の霊であるシバナ神が宿るといふ。」とあり、「シバナトートゥ」の項に「シバナトートゥ シバナ祈祷。海で死んだ人の霊を慰めるための祈祷。稲の初穂をシバナに供えて遺族が祈祷した。国頭字ではテンシバナとも言い、年二回シバナに御馳走を供えて祈り、家族もそこで食事した。麦は五月の節句までに、粟や米はお盆までにシバナに供える。また水も供える。略式には縁側です。」とある。
- 47) 先田光演氏『奄美の歴史とシマの民俗』（まろうど社、一九九九）に「柏氏の出身地西原」（三五五頁）とある。
- 48) 注24の下野敏見氏「沖永良部島の民俗行事」参照。
- 49) 話者は鹿児島県大島郡和泊町西原の男性（昭和十五年生まれ）。令和三（二〇二一）年十一月六日・原田調査、採集稿。
- 50) 話者は鹿児島県大島郡和泊町西原の男性（昭和十四年生まれ）。令和三（二〇二一）年十一月六日・原田調査、採集稿。
- 51) 西村サキ氏『沖之永良部 島民生活ードリネ地帯の稲作一』（ふだん記全国グループ、一九八九）、八五～九〇頁。
- 52) 注4の『沖縄文化史辞典』、「ニライカナイ」の項に「奄美の道の島あたりではニライをニルヤとかネリヤ、ネラヤという」とある。注45の甲東哲氏編『島のことば 沖永良部島』、「ニラ」の項に「ニラ 海のかなたにある信仰上の国。稲種子はここからもたらされたという。また、ニラの神はユイギ（海岸の漂流木）に身を変えることがあり、生まれてくる子にクレ（身分・運命）を受けるとされていた。かつては新麦・新米がとれるとなぎさに行ってニラの神に供えたが、後には戸を開けて縁側に供えるようになり、しまいにはそれもなくなった。」とある。
- 53) 注32の『国頭字誌』、五二五頁。
- 54) 注4の『沖縄文化史辞典』、「ウンジャミ」の項参照。
- 55) 注32の『国頭字誌』に「海下り（ウミリー）」（五二五頁）とあり、甲東哲氏『分類 沖永良部島民俗語彙集』（南方新社、二〇一一）「ウミリ」の項に「海降り」（二〇五頁）とある。
- 56) 話者は鹿児島県大島郡和泊町国頭の女性（昭和十一年生まれ）。令和四（二〇二二）年八月八日・原田調査、採集稿。
- 57) 話者は鹿児島県大島郡和泊町国頭の男性（昭和十年生まれ）。令和四（二〇二二）年八月八日・原田調査、採集稿。
- 58) 注45の甲東哲氏編『島のことば 沖永良部島』、「ニジュースヤ」の項に「二十三夜月待ち」とある。
- 59) 注23の宗岡里吉氏『知名町瀬利覚に伝わる昔ばなし』、

「ウミルー祭りについて」の項。

- 60) 注24の下野敏見氏「沖永良部島の民俗行事」参照。
- 61) 注47の先田光演氏『奄美の歴史とシマの民俗』、「ウミリ祭」の項に「表8 ウミリ祭の実施状況」（三五八頁）がある。
- 62) 松山光秀氏『徳之島の民俗[1]シマのこころ』（未来社、二〇〇四）所収「徳和瀬のハマオリ行事」に「古くは浜に出て身を清め、海の神を祀る行事ではなかったろうか」（六一頁）とある。ウンジャミ系の祭事と徳之島の「浜下り」との関係についても検討してみる必要がある。
- 63) 『琉球国由来記』に記載されたシニグ・ウンジャミの分布域については注4の原田信之「沖縄県伊平屋島の海神祭伝説」の「I 『琉球国由来記』の海神祭記事」参照。

〔付記〕

本稿は、日本学術振興会令和三年度～六年度科学研究費・基盤研究C・課題番号21K00285の成果の一部である。調査に際し、和泊町教育委員会、和泊町誌編さん委員会の方々に大変お世話になった。記して感謝申し上げます。

